
紅い夜 -アカイヨル-

春夏 愁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅い夜 - アカイヨル -

【Nコード】

N1303U

【作者名】

春夏 愁

【あらすじ】

魔法もない、汚い灰色だらけのこの世界で、一人佇む赤髪の死神。時は流れ、世界も移ろい変わりゆく。ただ自分だけが変わらない――。明日も変わるはずがない。

仕事は決まっているのだから。

序 〈マエガキ〉

人々は皆

生死を死神シニガミの手に

ゆだねられている事を

今 一度 知る必要が

あるのではないか……。

—— ハア、ハア、ハア。

闇夜。

狭く汚い路地に荒い吐息がこだまする。雨上がりのせいか、水溜まりが多く、湿度も高い。足元に絡みつくような薄い霧が垂れ籠み、視界は良いとは言えない。生ゴミの鼻につくような匂いも立ち込めている。

みすばらしい格好をした男が、水溜まりに足をとられながらも全速力で走っていた。荒い息遣いの中、唾を無理矢理飲み込む音が、どれだけ生命の危険に晒されているか、容易に想像することが出来る。彼の抱え込んでいる右腕は出血多量の為か、既に言うことをきかない。

男の走った後には、赤い血痕がくすんだ石畳の上に、シミのように残る。そして血痕は雨水と交ざり、輪郭がじわりと滲んでいった。

彼はフードを深くかぶり、後ろを気にしながら、何かから必死に逃げてるようだ。

突然。

稲光のような閃光が走る。乾いた銃声が風を切り、辺りを不気味な残響音で包み込んだ。

そして、不幸にも鉄の弾丸はフードの男の細い右足を貫いていた。

男はバランスを崩し、地面に倒れこむ。言葉にならない呻きと、小刻みに震える顎、流れ落ちる汗。

彼の吐息が路地に虚しく響く。

「手間かけやがって……」

背後の暗闇から黒いサングラスをかけた男が現れた。30代程だろうが、顎には少量の髭を蓄えている。彼の右手には、銃口から煙が立ち昇る、44口径のマグナムが握られていた。

「お前が持ち出したもの、返してもらおうか」

サングラスの男は、顔を緩ませながら脅した。

撃たれた男は倒れた際に、フードが取れ、痩せこけた頬と白髪混じりの頭髪をあらわになっている。顔面蒼白になり、痛みのあまり、喋れず、悶え苦しんでいるようだ。汚い薄汚れた灰色のスポンは、赤い鮮血に染まってゆく。

「直ぐに楽にしてやるよ、ハハ……」

サングラスの男は銃を再び構えた。そして――。

男は楽しむかのように。歌を歌うかのように。何度も何度も、鈍く光る銃の引き金を引いた。

抗^{あらが}う羽虫を徹底的に、捻り潰すかのように。彼は至近距離から滅多撃ちにしたのだった。

転がる薬きょうの音がサングラス男の気分を高揚させた。彼は高笑いせずにはいられず、心地良い硝煙が彼を包み込む。

あの青ざめた顔の男はもう、生きてはいないだろう。生臭い路地裏に濃い血の匂いも辺りに広がった。

「……可哀想に」

「だ、誰だ!!」

突然の声に男の身体が震える。男は辺りを見回した。しかし、周りには白い霧が立ち込め始めていて、視界がきかない。

この季節ではまんざら珍しい事でもなかった。しかし、男にとっ

て不安はつのるばかりである。既に生ゴミの匂いと火薬の匂い、更に血の匂いで嗅覚が完全にきかなくなっており、その上、霧で視覚さえも奪われかけていた。

先ほどの声は何者か。

さっき撃ち殺した男とは、明らかに違う。

奴の仲間か？

なんだか、声が若かったが――。

男がいくら思考を巡らしても、行き着く宛てなど、見つからない。そして、焦ってゆくばかりだった。

「オイオイオイ！！ 誰だい？ 俺のマグナムに撃ち抜かれたい奴は！」

男は大声を上げることによって、恐怖から逃れようとした。愛銃を構えながら、喉の奥から今でる最も大きな声で虚勢を張る。

「可哀想にな。防弾チョッキをも貫く銃で撃たれてな…… 辛かったな……」

しつとりとした、落ち着いた声が明らかに近くで聞こえた。サングラスの男が先程撃ち殺した奴に目をやる。
するとそこには、声の主は死体のすぐ横に佇んでいたのだ。

最早、人型をしていない、かつての人間を憂^{うれ}うかのような眼差しで眺めている。

赤い髪 of 青年、いや少年か。高校生ぐらいだろう。

彼の眼も燃えるような赤色だ。黒いロングコートがやけに大人びて見える。

男はあまりの近さに一瞬たじろいだ。

こいつ、ずっとここにいたのか――。

男は驚きと恐怖の余り数歩下がり、躓^{つまず}き、転びそうになったのを必死に誤魔化した。

なぜなら相手は、ただの、高校生ではないか。

男は一瞬でもたじろいだ自分を恥じた。

表の社会も知らない、乳臭いガキに何がわかるんだと。

「お前、何故ここにいる？ ガキは出歩いちゃ駄目な時間のハズだが、ハハ……」

サングラスの男は、有無を言わず、赤髪の少年のこめかみに例のマグナムをあてた。

何故か口が緩む。身体が震え、銃口も揺れる。

「助けて欲しけりゃ、何も言わず立ち去れ！ 俺はこの後、海外に飛ぶからよ！」

赤髪が静かに死体の胸に手を当てた。すると、血みどろの口から白い光が浮き上がる。ゆっくりとゆっくりと。白い光の球で、汚い路地裏がほんのりと明るくなる。

そして、光は彼らの頭上を何度か旋回すると、どこか安心したようにフツと消えた。

ほんの数秒の幻想的な世界に、サングラスの男は現実を忘れてしまいたいそうになる。

——って、さっきのは、一体なんだ。

幻想的とかそのような問題ではない。
意味が、わからない。

「な、なんだよッ！ さ、さっきのはよッ！ て、てめえは化け物かッッ！」

男は驚きの余り言葉が上手く吐き出せず、何を言っているのかすら自分でも理解できていなかった。何せ、自分の目の前で起こったことすら理解できていなかったから、である。

男の言葉に赤髪の青年は顔を上げ、鋭い眼光で睨みつけてきた。

いや、こいつ、何故、銃をつきつけられているのに、こんなにも余裕でいられるのか。

普通、社会も知らない学生諸君が、こんな余裕の表情を浮かべるだろうか——。

「化け物？ それはちよつと違う」

月の光りに照らされながら、赤髪は不敵な笑みを浮かべた。雪のよう白く、端正な顔が異臭を放つ水溜まりに綺麗に写し出される。頬にある、黒い蛇が絡まりあう刺青が今にも襲いかかってきそうに見えた。

「俺はただ魂の後始末をしただけ。 化け物は人を殺した、アンタのほうじゃないのか」

赤髪が馴れた手つきで銃を払い退け、ゆっくりと立ち上がった。

男は声も出せなく、身体も動かなくなる。

逃げたいのに、逃げられない。大声で喚き散らしたいのに、声が出ない。

男は生唾を飲み込んだ。

そして、赤髪は硬直する男を見下すかのように、横をすり抜ける。そのすり抜け様、赤髪は男の耳元で囁いた。

「俺の仕事は魂と肉体を繋ぐ鎖を断ち切ること……」

「ま、まさか!？」

男の血の気が顔から下へ、さーっと引いていく。男は恐怖以外、何も考えられなくなっていた。まさに、身の毛がよだつとはこの事だろう。

初めてこのような体験をしたのだから。

初めて意識したのだから、自分の死を。

「そのまさか……」

狭く、暗い路地に、男の悲鳴が響き渡る。

夜空にはただ遠くで、ぼんやりと、三日月が踊ってるだけだ。

これはある霧の深い日の深夜3時の出来事である。

序 《マエガキ》（後書き）

ちよつとずつ書き直していつてますので、色々変な所がありますが、
よろしく願ひします。

始　へハジマリ

麗らかな朝日と共に雀が呑気に歌う。柔らかな日の光が大きな窓から部屋に差し込む。

突然、アパートの一室から、爆音に近い目覚まし時計が踊るように鳴り始めた。外で歌っていた雀の楽団も驚いたのか、一斉に空へと羽ばたき、黒い電線がゆらゆらと余韻を残して揺れている。

部屋の住人といえば、目覚まし時計の効果が全くなく、ベッドの布団がもそもそと動くだけであった。白い布団が気持ちよさそうに朝日を吸っている。

何回目だろうか。

近所から苦情がくるのではないか、というくらい鳴り響いたあと、やっと布団から手が出てきた。

どうやら枕元の目覚まし時計を探しているようだ。ふらふらと左手を伸ばし、鉄の爆音機を探す。

と、そのときに小指が目覚まし時計に当たり、鉛色の時計は床へと落下した。その時の衝撃で運良く音が消え、からからと螺の転がる虚しい音が響く。

遂に衝撃に耐えきれなくなったようだ。

目覚まし時計が先に愛想を尽かしてしまい、壊れてしまった。毎朝の苦行の辛さが伺い知ることが出来る。手も力尽きたように動かない、白い布団に沈み込む。

心地よい朝日。

住人はそんな日の光を浴びながら、再び深い眠りについた。

時計の長い針が二回り程した後――。

「朝、か……」

ため息交じりの落胆した声と共に、ベッドの中から赤い髪の男がゆっくりと起き上がった。彼は両手で髪を掴みながら、かき上げる額から一筋の汗が光っていた。

彼の名前は、アーク。この部屋の住人だ。

彼はベッドの上から部屋の端を見つめ、何かを考えていた。そして、しばらくすると、彼はおもむろに立ち上がり、床に散乱したCDケースをふらふらと避けながら、キッチンへ向かった。冷蔵庫から大きなビン入りの牛乳を取り出し、一気に飲み干す。そして、握っていたビンを勢いよく、調理台の上に叩き付けた。空になったビンに自分の姿が微かに写し出される。

赤い髪。赤い眼。頬に走る黒い刺青。

激しい音の後に広がる静寂。自分の吐息しか聞こえない部屋。ゆっくりと冷たい水滴が彼の左手を濡らす。ゆっくりと頭が動き始める。

彼は空ビンを凝視しながら、昨晚のことを思い返した。

彼には決して誰にも言えない秘密がある。それは、彼が『死神』であるという事。

『死神』とは、人間の魂を肉体から切り離し、回収する者。つまりは、人間に絶対的な死を与える義務を負う者のことである。しかし、この世界の人間は、その真の存在を知る者は殆どいない。そして、その義務は変わることはない。

今も、昔も、そしてこれからも――。

「化け物……か」

潤いを取り戻した唇が、微かに動く。何度言われようとも、いつまでも耳に残る。そして、響くのだ。

彼の視界は黒く狭くなってゆく。しかし、顔を左右に振り、眠気を払う。

そして、氷のように冷たい手で、右頬を撫でた。黒い、黒い、刺青。

一生消えない、死神の証。

死神も不死身なんかではないし、血も通っている。心臓に杭を刺されなくとも、普通に死ぬ。

ただ、その可能性が極端に低いだけだ。

アークは何処からか拾ってきた、古いラジオをつけた。時折、電波の砂嵐が吹き荒れるラジオだが、彼自身あまり気にはしていない。電波の嵐の向こうで、微かに声が聞こえる。

彼はラジオを引き寄せ、アンテナを伸ばす。少しもクリアにならない音声に、アークは苦笑しながら音量を上げた。

アコースティックギターが奏でる繊細な音。全てを包み込むような優しい声。素朴で深みのある何か。

これが彼の日課の一つだ。なんでもない、ラジオから流れる音楽。綺麗な音。美しい旋律。

彼はいつも思っていた。

こんな綺麗な音で世界が溢ればよい、と。
こんな音だけを聞いて過ごしたい、と。

彼が暫く聞き入っていると、一段と強いノイズが全てを打ち消した。アークはハッと顔を上げ、現実の世界へと思考が戻る。

「遅刻だ……」

しかし、彼は動揺しなかった。

「……何も変わらない」

いくら今からどんなに急いだ所で、遅刻には変わらない。シラを切れそんな言い訳も思いつかない。

そう、何も変わらない。

こうして、彼はゆっくりと学校へ行く準備を始めた。

アークは学校に通っていた。しかし、彼の場合何十回目の学校生活である。

死神は人間と寿命が違う。生きることの出来る長さが違い過ぎる。ただ、身体が成長しないことには、昼間の行動は制限されていた。童顔な彼はどうも学生にしか見えない。

変に行動しなければ、厄介なことに巻き込まれずに済む。警察とか軍隊とか狩人とか、そういう人間的な組織とは極力関わりたくなかった。

彼は髪のをを整えながら、ため息をついた。

何度卒業しようと、終わりの見えない学校生活が続く――。

“あと何十年かの辛抱だ”

いつもそうやって、自分に言い聞かせる。

足枷。牢獄。いくらでも学校を擲擄^{やゆ}する言葉が見つかる――。

彼はモヤモヤしながら、制服のネクタイを結んでいた。手慣れたものだ、と素晴らしい出来に苦笑しながら、引き出しから絆創膏を取り出す。

大きくて、あまり目立たない色。

そして、例の刺青を隠すように貼り付けた。

勿論、死神だなんて秘密だ。誰かに教える気など、さらさらない。嘘も完璧に塗り固めて生きてきた。何を問われても、何食わぬ顔で答えることができる。

“いいえ、ただの傷です。誰にも見せたくないのに隠しているので”

眼を伏せて、あたかも暗い過去を抱えているような顔をすれば、誰もそれ以上は聞いてはこない。しかも、『一人暮らし』という、訳アリそうな条件は既に満たしている。

ある人が言っていた。

誰もが人に知られたくない秘密を持っている。しかし、人々はその秘密を知りたがるが、決して美しくも儚くもない。

醜く、恐ろしいものが大半である、と。

なんともその通りである、とアークは深く頷いたものだ。

秘密は秘密だから秘密なのである。誰かと共有したからと言って、楽になるはずもない。

最後に彼はノイズしか、聞こえないラジオの電源を切った。床に置かれたラジオは、無数の細かい傷は有るものの、さして大きな故

障はない。

そして彼は軽い鞆を持って、部屋を出ていった。ただ、ベランダに通じる大きな窓を締め忘れたらしく、添えられたカーテンが静かに揺れていた。

柔らかな日差しが相変わらず、降り注いでいた。開きっぱなしの窓は、絶好の風の通り道となり、秋の乾いた風がカーテンを揺らしながら、部屋の中に入り込む。カーテンは波を打つかのように、何度も、不規則に揺れていた。風の波が物を揺さうように、カーテンはラジオのアンテナを引っかけて倒してしまった。

海のように静かに。何事もないかのように穏やかに。

ごとり、という鈍い音と共にラジオの電源が入ったらしい。ぴりぴりと電波の音がする。しかも、先ほどよりもクリアに、電波の向こう側の人の声が聞こえる。

——今朝の午前3時ごろ……東部カーシャ市サン地区の路上で、男性が血を流して倒れているのが発見され……病院に運ばれたが間もなく死亡が確認された——

所々、電波が途切れ、音声が不明瞭になる。しかし、先ほどまでよりかは、かなりマシのようだ。

——警察とW・E・A・Dは近くにいた男を殺人の容疑で身柄を拘束し……逮捕された男は自らを……と名乗っているが、奇声をあげるなど精神状態はかなり不安定である為——

ラジオのパーソナリティーの男性が普段とは一味違った、深みのある声で淡々と読み上げていく。そして音楽が入り、コーナーが変わる。

——狩人^{ハンター}って色々な仕事してるんですねー。あたし、全然そーゆーの意識してなかったんですけど——

若い女性の声が、少し笑いながら、先ほどのニュースに一言を添えていた。

——今じゃあ、初動捜査にも政府から認可を受けた団体なら参加可能らしいね。警察の人情費も馬鹿にならないからなあ。我々の命を死神から守る民間人、つまり狩人^{ハンター}。応援していきたいね——

先ほどの男性が、いつもの少年のような声色で、他愛もなく続ける。

——そうですね！ CMの後は大人気占いコーナーです——
——デイス プログラム プロデュースド バイ W・E・A・
D 死神殲滅連盟——

常へニチジョウ

『本当に不本意である』

アークは心の隅で力無く呟く。時には途切れそうな声で、悲壮に満ち溢れた声で、自分に話しかける。

寂しい響きはいつまでも心の奥底にこびりつき、離れようとしな
い。鉛のようにずっしりと重いその言葉は重力に逆らわず、ずぶず
ぶと沈みこんでゆく。

自分は何回義務教育受け、何回高校受験し、何回高校を卒業しな
ければならないのか、と。

彼は何度も何度も自問自答を繰り返す。この世界、今の自分の現
状、それに現在起こりうる全ての事象のに歯痒さを覚えていた。

答えのない現状。何も変わらない実情。

『全くもって不本意である』

あんな牢獄のような校舎。軍隊のような厳しい校則。学校なんて
単なる足枷に過ぎない。

ここの高校で8回目の高校生活となる。死神である彼は寿命が長
い分、身体の成長も遅い。その為、見かけが高校生以上にならなけ
れば、彼にとって本当の意味での高校卒業は訪れないのである。

アークは昼前に学校に着いた。

ビルとビルがひしめき合う中に、排気ガスで汚れたような学校があった。コンクリートはススで汚れ、黒ずんでいる。門の支柱や、訳の分からない銅像は酸性雨で溶け出し、寂しそうに汗を流していた。門の入口から続く広葉樹の並樹は色付き始め、秋の訪れを告げている。落ちそうな葉は風に揺られ、そよいでいた。

グラウンドには授業中の為、当然の如く人一人いない。

今日はテストらしく、先生の声も全く聞こえなかった。グラウンドも廊下も妙な静けさが漂っている。彼は自分の足音しか聞こえない事に気味悪さを感じつつも、2階の自分の教室に向かった。

「気味が悪いくらい静かだな……」

アークはこのシステムティックな教育に苦笑しながら足を進める。彼は『2・4』と札がかかっている教室と確認し、ドアを開けた。38人も詰め込まれた教室。そこは汗と香水の混ざりあった、なんとも言えない匂いが鼻につく。クラスの全員が顔をあげたので、彼は全員と目があつた気がした。しかし、生徒達はすぐに下をむいてテストを再開した。

3限目は現代文らしい。あまり手が動いてないように見える。

「オイ、アーク！ オマエ、テストに遅れてくるわ、髪の毛染め直してこないわ、眼をどうにかせんか。全く」

運悪くも、クラスの担任が試験官をやっていた。彼は『マツザキ』といい、保健体育の先生で、生活指導の担当もしている。が、あまり評判はよくない。

体育の先生らしくガッチリとした体格にフィットしたＴシャツを身にまとい、シャツをジャージのズボンの中にキッチリと収めていた。しかし、最近では頭が薄くなりつつあり、眼鏡の奥は女子の下半身しかみてないともっぱら噂であるようだ。

「先生、これ地毛っす……」

アークは少し下手に出てみる。

彼もこんな赤い髪が好きなのではない。とにかく目立つし、肌は色白なので、鶏みたいに見えるのは知っていた。二度程、真っ黒に染め直してみたが、何故か一日で真っ赤に戻った。

何も変わらない。そんな現状。慣れっこだった。

最近ではグローバル化が進み、“民族”やら“人種”というものが曖昧になってきていて、外見だけで物を言う人は少なくなってきた。しかし、マツザキの頭は１００年前と変わらない。

ただ、全体的にこの街の人々は排他的だ。治安が良くない、ということが一因に挙げられるかもしれない。

それがアークには何処か心地よい。

誰も他人に興味を持っていない。誰にも気を使っことなく、誰の世界に踏み込むことはない。

死神には気楽で居られる街だった。

「アーク！ あと20分で終らせろよ！」

「ハイハイ……」

彼は窓際の一番後ろの空いている席に座った。現国の内容は、著名な筆者がとある国の作家について、ぐだぐだと難しい言葉を並べ、独りよがりな批評を書いただけの文章だった。

へヴィだ。量的にも。

アークはテスト用紙をパラパラと捲りながら、問題を眺めている。

既視感。これを表す以外に言葉が見つからない。

アークは小さなため息をつく、彼の手は澱みなく動いた。

五分が経とうか経たないかの時に、彼の手は止まった。

彼は大きなあくびをし、解答用紙を眺める。解答欄の空白は全部埋まった。マツザキの方をチラッと見たが、彼は雑誌を開いている。きっと趣味のクロスワードパズルをしているに違いない。ペンを回しながら、頭を抱えていた。後ろからでも髪が薄くなってきていることが確認できる。

——世の中、不平等だらけだ。何故、年下のあいつに俺は下手に出なきゃいけない。

彼の心中は愚痴だらけである。

何より『高校』という空間が彼を不快にさせた。締め付けるだけの牢獄。

アークはマツザキを見るとイライラするので、窓の外に目を向けた。

珍しく雲一つない青空だった。太陽が眩しくグラウンドを照らしている。昨日まで灰色の雲が世界を覆っていたのが、まるで嘘みただ。

そしてまた、夜の姿とは違い過ぎる。

屋上で昼寝がしたい。そんな気にさせるくらい、いい天気だった。

さて、どうするか、彼は外を見ながら考えた。
門の近くの並樹がそよいでいる。

「先生……」

「なんだ」

マツザキはクロスワードパズルを睨みながら答えた。

「気分が悪いんで保健室行ってもいいですか？」

「駄目だ」

マツザキは顔を上げようとしなかった。
彼のシャープペンシルは回り続ける。

「先生、その答え『シニガミ センメツ レンゴウ』じゃないですか」

アークは後ろの席から笑みを投げかけていた。

この世界の力関係はどこか歪んでしまっている。

本来、イニシアチブをとるべき政府は形骸化^{けいがい}してしまい、軍・警察が国を動かしてきた。中でも近年その二大組織に、『W・E・A・D』、またの名を『死神殲滅連盟』という新たな団体が主導権に握り始めたらしい。

この教師マツザキが読んでいる雑誌も表紙からして、W・E・A・Dのプロパガンダ雑誌である。

教師がこのような雑誌を読むこと事態、アークは首をかしげるようなことだが、余り深く考えないことにした。その方がお互い幸せに近付けそうだったからである。

マツザキは教卓の椅子からスクツと立ち上がり、アークの方へと近づいてきた。

アークもそれに応じるように、椅子から立ち上がる。
すると、マツザキはアークの肩に手をのせて耳元で囁いた。

「何故、答えがわかったかはあえて聞かないでおこう。ただ……」

アークはマツザキの胸にそっと左手を当てた。

「ん……？」

「人に言いたいことがあるんなら、眼を見て話せよ、な」

とアークが呟くと、マツザキの顔がみるみる真っ青になった。

彼の瞳孔は開ききり、脂汗が額から腕から一瞬のうちに噴き出した。更に小刻みに震えている。

燃えるような赤い眼。

人はこの色が恐ろしく見えるらしい。マツザキも眼を合わそうとはしない。

だから、規則を以て変えようとする。

小さき人間が考えること。愚かな規則。

「保健室」

「あ……。ああ……」

そして、マツザキは普段の威張り腐った声からは考えられないような声を出した。

クラスの生徒たちには、一体何が起こったのかわからなかった。

ただ、マツザキがこの教室からを許可したのは間違いない。

アークは足早に教室から出て行く。

マツザキは去っていく彼の背中、をただただ見送っているだけだった。彼の額から汗が2、3滴、床に寂しく落ちた。

女 《カノジョ》

ああ。

やってしまった……。

アークは自己嫌悪の渦の中に居た。
それは黒くて暗い渦の中。

テスト中で、誰も気にしなかった事が幸いしたが。

前はこんな事はなかった。
こんなに苛々しなかった。

奴等の戯言なんてを聞き流す事が出来た。

やはり、
限界が来てるのか？

あんなマツザキごときの小物に苛々するなど、自分らしくない。

アークは屋上の給水タンクの上で、額に手の甲を当てながら考えていた。

自分がどれほど長生きで、
自分がどれほど苦しんで、
自分がどれほど悩んでいるか、
大声で叫んでやりたかった。

そうすると楽になるかもしれない。
だが、それは一時だけの甘い甘い幻に過ぎない。

ため息と小言しか吐き出せない口が空しい。
虚しい。

「空は蒼い……」

嫌なくらい、この街では珍しいくらい青くて、高くから見下ろしている。

風は驚く程冷たく、彼の頭上を走り去っていった――。

本当はマツザキにケンカを売った後、帰ってもよかった。

しかし、逃げたように思われるのが何より嫌だった。

「ハハ……」

乾いた笑いが漏れる。

「子供っぽ過ぎる……」

彼は額に手を当てながら、自分を嘲笑った。
指の隙間から、太陽の光が覗く。

すると、バサバサと羽音がし、一羽の鴉が彼のつま先に止まった。

死神は何故か動物に好かれる。

動物は彼が死神である事が分かるらしい。

彼もまんざらでもなかった。

鴉は楽しそうに嘴を鳴らしている。

彼は制服のポケットの中に入っていたクッキーを取り出した。

それを鴉の方へと投げてやると、鴉は上手に受け取り、満足げに羽を広げる。

そして、誇らしげ飛び去っていった。

アークは鴉が見えなくなるまでは目を開けていた。

鴉がビルの間に消えてゆくと、ゆっくりと目を閉じる。

遠くで煙突が煙を吐き出している。

その煙はやがて空に溶けてゆくだろう。

全部包み込んで。

すると、誰かが屋上にあがって来る音がする。

ような気がした。

——混沌こそ我らの。

過去の自分。

血と悲鳴が支配する世界。

あの丘の上に立っているのは、自分？

『ハハハハ。楽し過ぎるなッ！』

『素敵な髪……』

懐かしい声。

本当は思い出したくもない。

だが、心の隅は居心地がいいらしい。

貴女はいつも冷たく微笑みかける。

『硝煙と銃声。フッフ……。ハハハ……。』

本能が全てだった。

『この魔女めがッッ！』

今も昔も。

——ハアハアハア……。

久しぶりに嫌な夢を見た。

彼は上半身を起こした。

汗で手のひらは湿っていた。

暑さのせいだけではない。

彼の呼吸はあからさまに乱れていた。自分らしくない。
こんなの。

「やっぱり、屋上にいたんだねえ。私の推理に間違いはなかった！」
聞き覚えのない声だ。

誰だ、こんな時に……。

彼は薄汚れたクリーム色の給水タンクから見下ろすと、そこにはこの制服を着た、栗色の髪の子生徒が立っていた。短めで整えられた髪が風に揺られ、大きく凛とした目がこちらを見つめている。

見覚えもない。

「私、エリカって言うの！」

聞いてもない。

アークは立ち上がり、給水タンクからヒョイとおりた。

風に香る彼女の香水に

ほんの少しだけ

胸騒ぎを覚えた。

「私ね、趣味で探偵みたいな事をしてるの！」

「前々から君の事気になってたんだ！」

「君、凄いよね。あのマツザキ先生を黙らせるなんて！」

「君なんて名前だっけ？」

「そうそう、アーク君」

「あ、私は『エリカ』でいいからね！」

「ところで、君一人暮らしだっけ？」

ようやく、アークに喋る機会が与えられた。

よくまあ、こんなにも息継ぎもせず、矢継ぎ早に喋れたものだ。

アークは感心しながら、銀色のフェンスにもたれ、

「まあ……、で」

「そうだと思ったんだよ！　いつも君はパンドミのサンドイッチだからね！」

「私もあそこのパン好きなんだあ」

”パンドミ”とはアークがよく立ち寄るパン屋のことである。
近所である為か、おばさんの人の良さの為か、学校の行き帰りにお
邪魔することが多い。

「そうか」

心底どうでもいい。

すると、エリカは古ぼけた小さな手帳を取り出した。

「パンドミ常連……、と」

彼女は何かを書き加えた。

（まあ、あながち間違いではない……）

彼は心の中で苦笑した。

「そうだ。君、フリーで死神狩人してるんでしょ？」

彼女は手帳のページをめくりながら訊ねてきた。

「まあ……」

アークは一応、『狩人』としての資格はとつてある。

（学校や名前を変える度にわざわざ取りなおさねばならないが）

そうすれば、万が一、深夜の仕事中に狩人や警察に見つかったとしても、何故ここにいたのか、という言い訳がたつ。

大半の死神が言い訳作りの為に、狩人の資格を持っていた。

「やっぱりね！ 強い男じゃないと務まらないもの」

彼女の栗色の瞳が彼を見つめる。

「実は私の兄も狩人なんですよ」

アークにとって一番聞きたくない言葉だった。

「訳を聞きたい？」

彼女は、わざと意地悪そうに笑う。

嘘ですよ、と笑いながら、彼女は簡単に訳を話し始めた。

「昔、私が小さい頃に両親が死神に殺されて――。
私はただ『真っ赤』という印象しかないんだけど、
私より6歳も年上の兄は、その一部始終を今でも鮮明に覚えているらしいの。」

今でも頭から消えない
って言ってる。

もうそれは言葉では言い表せないって。

だから、二度と、自分みたいな子供は作りたくないらしくて、 15

歳から『W・E・D・A』に入ってるね。

ボロボロになりながら戦い続けて、

今ではしがない窓際幹部やってるの。

到底、幹部なんかに見えないけどね……」

彼女は深いため息をついた。

兄の日常生活でも思い浮かべたのだろうか。

しかし、アークは彼女の身の上話どころではなかった。

（この街に幹部がいるのか……）

この事実の方がエリカの存在より憂鬱にさせた。

ちなみに、W・E・D・Aとは

World Exterminate Death Association
の略で

世界から死神を根絶させようとする世界的な組織である。

世界死神殲滅連盟だと凄い数のクレームがきたという事で、現在ではW・E・D・A^{ウェーダ}で落ち着いている。

心底どうでもいいことに人間はこだわる気がする。

「……で、死神っていう証拠はあったのか？」

アークは彼女の目を見た。
目を見たら、大体その話が事実かどうかわかる。
彼女の眼は綺麗な濃い栗色だ。

「あ、あったわよ。犯罪の手口がよく似てるって、警察の人が言ってたらしいの……」

彼女は少し動揺しながら答える。

アークは大きなため息をついた。

「な、何？　なんか変だった？」

少しエリカの気に触ったらしい。

「いや、別に」

アークは遠くのビルを眺める。

本当の死神ならば手口など残る筈がない。

自分が一番よく知っている。

例の『死神』と名乗る人間の犯罪者集団だろう、と彼は思ったが、今日初めて話した相手に信じて貰える筈もないし、逆に自分が疑われかねないので何も言わなかった。

事実、最終結果は何も変わっていない。

本当の死神も人間に与えるものは、『死』そのものだから。

『死』を与えたものが何か、その事実を知ったとて、

彼女の両親が還ってくるはずもないのだから。

近頃というかここ50年。

犯罪集団『死神』が急速に勢力をのばしていた。

彼等は強盗、殺人、放火、誘拐等々を生業とし、金を貰えば必ず実行した。

彼等の鉄の掟として、入ったら必ず顔に刺青を入れる事を強制している。

最近では警察とも癒着しているのではないかとマスメディアから憶測が飛び交う。

つまり、狩人とは彼等の逮捕、根絶をする為に組織されたのだが、

いかんせん紛らわしい。

人間が、人間か死神か、なんて判断する基準がない。

人間に『魂集めてます』と言ったところで、殺人者に変わりはない

のだから。

別に好きで集めてる訳じゃない。

死神が魂を集める理由いくつかある。

人間の為でもあるのに、彼等は知る由もない。

「ねえ、一つ聞いていい？」

エリカの声がアークを現実に戻した。

「答える保障はないが？」

エリカは、構わないよ、と言わんばかりの顔をしていた。

「どうしていつも絆創膏をしているの？」

アークは一瞬、驚いた。

やはり、人々の興味はここへ向かう。

しかし、何年も何年も同じ質問に答えてきたので、模範解答が出来上がっていた。

ただ、眠気を払うには丁度よい衝撃だった。

「初めてそんな顔見たよ！」

エリカは急に笑顔をこぼした。
今までなかった人間の反応にアークは驚く。

「実は私達、高校の2年間ずっと同じクラスなんだ。覚えてる？」

彼女が指折り、アークとの思い出を語る。

そんな覚えてすらない話より、エリカの姿がアークの眼に写る。

彼女は風になびいている栗色の髪をかきわけた。

彼女は綺麗だ。心までも。

純粹であるが故になんでも喋ってしまう。

純粹だからこそ人をすぐに信じてしまう。

だから、自分達の嘘を重ねやすい。

「『因子欠乏症』という病気で血が止まりづらい上に、ここの皮膚が弱いから……」

勿論、大きな嘘である。

血が出れば、勝手に止まるし

敏感肌でもなんでもない。

更には『アーク』と言う名前も34個目の偽名だ。

彼女に見えている自分は、嘘の上に成り立っている。
嘘での自分しか、この昼の世界には存在しない。

むしろ、人間界には本当の自分など存在しない。

友人も協力者も、人間には存在しない。
死神にも仲間なんていないかもしれないが、特に気に病んだこともない。

嘘に嘘を重ね続けた結果が今だ。
嘘をつく罪悪感など風化してしまった。
嘘をつき続けなければ命がない。

そんな世界で今まで生きてきた。

「なんか大変なんだね……」

何に向けての言葉なのか。

彼女の大きな目はアークの何をとらえているのだろうか？
あまりにも優しい言葉が、逆に彼を不安にさせる。

何か奥の方で、揺らぎ始めた気がした。

「いけない！」

彼女は腕時計を見て言った。

「13時から『スーパースーパー』でお肉のタイムサービスだったの。」

スーパースーパーとは

この近辺のみチエーン展開している中小スーパーで、
タイムサービスはかなりお買い得な買い物が出来る。
主婦の心強い味方である。

「本当はね……ま、まあいいやッ！
じゃあ、また明日ね。」

彼女は足早に屋上から居なくなった。

よっぽど牛肉を手にいれたいようだった。

彼女が最後に口を濁したのが気になったが、
アークにとって大した問題ではない。

（久しぶりに学校で人間と喋ったな……）

彼は人とはなるべく喋らないようにしている。
喋るといつかボロが出てしまう。

そこからつけ込まれ、
侵食されて、

喰い殺されるのは自分なのである。

そういつた死神を何人も見てきていた。

『死神と人間は絶対に相容れない』

死神は嘘の仮面を

何重にもつけていて、

それで人間と偽っている。

それを認め合う事自体困難なのである。

（それに……）

仲良くなると別れが辛くなる。

死神と人間とでは寿命が違い過ぎる。

死神は半永久的に生きる事が出来るが
人間はそうではない。

自分の胸に虚しさが残るだけ。

いつか、自分が殺さねばならないのだから

いつか、自分が魂をとらなければならないのだから

彼は絆創膏に手を当てた。

今日も何処かで
身体の『啼く』声が寂しげに響いた。

啼　　へナキコエ　　唄（前書き）

啼　《ナキゴエ》　唄

人はいずれ死ぬ

その時に
身体が叫び声をあげるのを
知ってますか？

それは

どんなに深い海の底よりも
寂しくて

どんなに悲しいラブストーリーより
切なくて

どんなに綺麗な夕焼けより
胸が張り裂けそうになるほど

それはそれは
綺麗に高く啼^なく

それは
死神にしか聞こえない

悲しい声。

人間は

呼吸が止まったら
心臓が止まったら

『死』

と判断する

しかし、それは違う

ただ

身体が壊れて動かないだけ

死んでなんかない

まだ

魂が鎖で繋がれたままだから

まだ

魂は死んでなんかないから

ただとだけと

身体が壊れたら

魂だって痛みを感じるの

痛くて痛くて
たまらなく痛いのに

身体が壊れてて
声が出せなくて

魂が力を振り絞って
叫び声をあげる

『誰か、助けて……』

と。

死神は
その消え入りそうな声を頼りに
毎晩、漆黒の闇夜を飛びまわる

魂の大部分が

地上の世界から
消えて無くなってしまっけど、

ほんの少しだけ
ほんの少しだけ

死神の中に残る……

ほんの少しだけ…

彼等が

何を想い、
何を感じ、
何を叫んだのか

それは
死神と魂にしかわからない。

耳をすませば聞こえる

死神が走る足音が

魂に話しかければわかる
貴方の想いが――。

追 《ツイセキ》

（この街にはW・E・D・Aの幹部が存在する……。あまり迂闊な行動は取れないな）

彼はエリカが去った後、再び眠たくなり、寝てしまった。

眠気の波は絶え間なくやってくる。

そして、気付けば夕暮れ時。

そろそろ日が暮れる。

太陽はビルとビルの上に沈み始めていた。
琥珀色の空に雲が流れている。

さあ、仕事の時間だ……。

彼は昼ごはんとして貰った、パンドミのカッサンドを頬張りながら、

家路を急いだ。

暮れかける太陽はこんなに汚い街でも、綺麗なオレンジ色に染めあげる。

(……?)

アークは違和感を感じた。
首筋に視線を感じる。

彼は小綺麗な店が立ち並ぶ、人通りの多い道を駆け抜けた。
石畳の上は走りづらい。
人を避けなければならない時に、滑る可能性があるからだ。

すると、一つの足音が速まった事に気が付いた。

明らかに誰かがアークを追いかけている。
足音が一つであるから、単独である事は確かだ。

(なるほど……)

彼は帰り道とは関係のない狭い路地に入った。

後ろから走ってきた人影も慌てて、その路地に走り込む。
危うく石畳に足を取られそうになりながら、路地を曲がる。

しかし、その路地は出口のない行き止まり。
すでに、アークの姿もその場には無かった。

オレンジ色の煉瓦がところどころ崩れており、石畳の道はぬるついでいた。

ここはどんなに天気がいい日でも、日が当たる事はないだろう。

汚い緑色の苔こけがその年月を物語っていた。
黒さが滲み出ている。

後からつけてきた人は、きよろきよろと辺りをを見回し、アークを探しているようだ。

ベタなチェック柄の探偵帽子。

ベタなチェック柄のマント。

顔に全然あつてない大き過ぎるサングラス――。

彼は姿さえ見れば誰かわかった。
逆に微笑ましくも思った。

「一体何のようだ……？」

彼はスツと後ろに現れた。

正しくは、『上から降りてきた』と言った方がよいだろう。

後ろからつけてきた人物は、慌てて後ろを振り向く。

振り向いた瞬間、大きなサングラスが飛びそうになったが、その人は必死に押さえつけていた。

「男を追い回すのはあまりいい趣味とは言えないな、エリカサン？」

エリカは冷静を装って、大きすぎるサングラスを外した。

明らかに手が震えている。

「よ、よくわかったわね。流石、フリーで狩人やっているだけあるわ……」

ハア……。

とアークは大きな溜め息をついた。

不機嫌であることがひしひしと感じられる。

「あんたの趣味が依頼か知らないが、追い回されると困るんだ。こっちは命張って狩人やってるんだよ」

エリカは彼の眼差しに悪寒を覚えた。
だが、ここで引くわけにはいかなかった。

「私だってね……」

「お前は俺と関わらない方がいい。兄貴は何も言っただけでなかったか？
『^{ハンター}狩人には狩人の世界がある。そこへ常人は足を踏み込む所ではない』と。」

俺は自分を守るだけで手一杯なんだよ。
勝手についてきたお前の命の保障なんて、何一つ出来やしない」

彼が、

「死にたいのか？」
と微かに呟いたのが聞こえた。

「狩人はどんな事件に巻き込まれるかわからない。」

色んな奴の怨みを買いきて、今、事件が起きててもおかしくはないんだ」

アークが淡々と喋る中、エリカは黙って下を向いていた。手はギュッと何かを握りしめているようだ。

「お前には悲しんで貰える存在がいるだろ……？ その人」

「貴方なんかには解らないのよ……」

エリカはアークの言葉を遮るように、涙声を絞りだした。

彼女の今まで味わってきた、悲しみと悔しさが涙混じりの声に乗って伝わってくる。

まるで、屋上で会った彼女と同一人物ではないように。

石畳の上に点々と雫が落ちた。

涙である事は間違いない。

アークが彼女を泣かせてしまったのは明らかだった。

「私はね、私だってね。」

ホントは狩人になりたいの。

兄の助けになりたいの！

だけど、兄は認めてくれない。

兄が私を想っての行動とは分かってる。

でも、兄は私を養う為にいつも危険を犯してまで闘っている。

私はただ、外からのうのうと見ているだけ。

無力な自分は嫌なの！

『強い』ことを証明したいの！

だから、

死神狩人の君に何かしら勝てば、兄だって認めてくれるかと思った
……」

彼女は涙を拭きながら、消え入りそうな声で話した。

彼女も壮絶な人生を生きてきたことには間違いない。

「私は君の事を1から調べなおした。二年も前から。

だけど、手掛かりすら掴めなかった。

ただ唯一、テストの成績だけはマツザキのパソコンを覗き込めば、
簡単にわかった……」

アークはマツザキの情報管理能力には期待してないが、どんな管理

をしているのか、
一度見てみたいと思った。

「いつだってあなたは学年一位だった……。
いつも屋上で寝てるだけなのに。」

私は毎日毎日毎日机に向かった。だけど、
あなたに勝てた事は一度も無かった。

あなたはいつだって私の前に立ち塞がる……。」

冷たい風が路地を駆け抜けた。
ビルとビルとの狭い空に鴉が飛んでゆくのが見える。

「ねえ、どうしたらあなたみたいになれるの？
ねえ、どうしたらいいの——」

彼女は壁にもたれながら空を見上げていた。
きつと目から涙をこぼさない為だろう。
彼女の頬は昼に比べて少し桃色がかっていた。

（そりゃあ、死神だからな……。
まあ、何十年も同じような問題を解いていたら、誰でも出来るようになるさ）

とアークは心の隅で思ったが、
何も言わずに噛み締めた。

「まあ、お前はこんな世界に居ちゃ駄目な人間だよ。この世界の奴等
等は皆狂ってる。
俺みたいになろうなんて思うな……」

アークはエリカに背を向け、歩き始めた。

「あなたはいいわね……万能なんですから。
悩みなんて全くと言っていいほどないんでしょうね……」

エリカが吐き出した言葉に、アークの動きがピタッと止まった。

「それ、冗談でも怒るぞ……」

彼は静かに振り向いた。
エリカはその時初めて
彼が一人で狩人をやってきた事を実感した。

屋上で会った時とは
まるで印象が違う。

あの赤い髪がこれほど恐ろしく見えるとは、

あの赤い瞳がこれほど悪寒を覚えるものなのか、と。

「いつでも自分が一番不幸だ、なんて思っちゃいけない。誰かと比べる事自体がナンセンスじゃないのか？

自分の強い意志さえあれば、誰がなんと言おうが貫けるだろ？

兄貴がなんと言おうが、なってやれよ。血の海渡って行ける覚悟があるんだろ？人を……」

彼は喋るのを止めた。

少し、感情的になっていた事に気付いたようだ。

彼は一息を入れた。

そして、言葉を選ぶようにして再び話し始めた。

「誰にだって悩みはあるし、傷はある。俺はこんな職業やっているのに……」

人一人守れなかった。未だに夢に見ることがある。

だから、冗談でも俺みたいになろうなんて思うな。兄貴の気持ちわかってやれよ。大切な人を失いたくないだけのエゴだろうよ」

彼は小さく息を吸った。

「それだけ愛されてるってことだよ……」

エリカは彼が少しだけ寂しい目をした事に気が付いた。

彼の赤い瞳はもの悲しく、かつての日々を思い出すかのように遠くを眺めている。

「アークって、もしかして――」

その人と私を重ねてるとか……？」

エリカは笑いながら訊ねてきた。

勿論、話題を明るくする為の冗談である。

彼女の涙の跡が微かに
夕陽を反射したかのように見えた。

「有り得ない……。てか、立ち直り早いな……」

「それが私の売りですカラ」

彼女は満面の笑みで答えた。

これは反則だ。

男性教師なら一発でノシてしまいそうな程の破壊力だった。

すると、彼女は壁に持たれたまま崩れるように座ってしまった。

「ハハ……安心したら腰が抜けちゃったよ……」

エリカは顔を赤らめながら、腕の中に顔を埋めた。

「ホントは君と喋るのなんか、本当に怖かったんだから……。しかも、追いかけてみたら、こんな所に誘いこまれちゃったし……。こんな汚い暗い路地で！ 得体の知れない男と！ 二人きりなんて！ もう心が壊れそうぐらい怖かった……」

アークは恐れられるのは慣れていた。

それが仕事だと割りきっていた。人間の目はそんなに温かくない。

アークはエリカに歩み寄った。

そして、

アークは右手を差し出した。

エリカは不思議そうな目で、彼の手と顔を交互に見比べる。

「ほら、立てよ」

彼が無機質な言葉をエリカに投げかける。

エリカは彼がこのような行動に出るとは思わなかったが、この不器用さに内心笑ってしまった。

（このままからかってやろう——）

エリカはわざと不機嫌そうな顔をした。

「普通さあ、女の子が『腰が抜けて立てない！』って言ったら、おぶって家まで送っていかない？」

逆に私はそつちを期待したよ!」

エリカはふて腐れたような顔をし、崩れ落ちそうなタイルを剥がし始めた。

「そんなの恥ずかしくないのか?」

彼は先ほどと変わらない無機質なトーンで話す。
「というか、彼はいつもこうだ。」

「だって、そうしてくれないと私帰れないじゃん」

エリカは唇を尖らせ、追い打ちをかける。

すると、アークはエリカに背中を向けた。
「ここぞとばかりに」

エリカは立ち上がり、彼の背中に飛び乗った。

「立ったな……。今、完璧に」

「え？ 何？ 聞こえない？」

彼女の楽しそうな声が

アークの耳元に聞こえる。

（まあ、それもいい……）

「で、家はどっちだ……？」

エリカは少し考えて、

「うーんとね、忘れた！ でも、君の家に連れていってくれたら思
い出すかも！」

エリカはケラケラと笑う。

（最初からこの作戦だったのか……）

アークは気分的にうなだれた。

これはもう連れていくしかないだろう。

彼はエリカを背負い、自分の家の方面へと歩き始めた。

「ありがとう！ 思い出せそうな気がする！」

「……ここで降ろしてやろうか……？」

「ハハ……。それは勘弁。」

アークは

彼の背中にいっになく

明るい夕陽に照らされているように感じた。

「ん……？」

エリカが彼の肩の辺りをかいだ。

「淡いミントの香りがする……」

（——何処かで嗅いだ事のある香り……それはまだ私が幼くて……）

「部屋の芳香剤がミントだからな」

でも、少しだけ思い入れがある……
と彼は小さく付け足した。

「え？ 芳香剤の香りなの？」

エリカははつきり言って少し凹んだ。

（なんだ、勘違いか……）

エリカはアークの赤い髪の毛をいじり始めた。

「知ってる？ ミントってプレゼントを渡すときに添えると、『余所見しないで私だけを見て』って意味になるんだよ！ ロマンチックだねえ……あ！ もしかして！」

彼女は彼の背中であんなばかりに、身体を起こした。

「君が私に対するプレゼントで、そこにミントの香りをまとうてく
るという事は、私の推理が正しければ……」

ゴン！

鉄パイプの鈍い音が橙色の世界に響いた。

「あ。頭気をつけろよ。配管が沢山出てるから……」

「ねえ、今のわざと？」

彼女の明るい声がこだました。

空はやがて橙色から紫色に変わる。

薄汚れたビルも

錆びたカーブミラーも

捨てられた自転車も

全てを塗り潰す黒がくる前に

綺麗に紫色を写す。

アークは

空に一筋の飛行機雲が走っているのがわかった。

家 《スミカ》

アークは人一人がやっと通れる程の狭い路地を何度も曲がり、異臭を放つ換気扇の下を何回か通り過ぎた。

それほど遠くはないのだが、この道は確かに覚えられない。

エリカは16年間この街に暮らしてきたが、このような道の存在すら知らなかった。

彼女の肩がビルの壁に当たっただけで、制服のブラウスは黒くに汚れてしまった。

使い手が居なくなつた寂しい煉瓦造りの建物群が過去を羨むかのようにひっそりと立ち並んでいる――。

細い路地を抜けると高いビルに四方を囲まれた小さな公園に出た。

いや、公園ではない。広場だ。

かつて滑り台があっただろう所は4つの穴と砂場しかなく、

遊具は撤去したのか持ち去られたのかわからないが、
柱の跡しか残ってなかった。

木製のベンチがただ悠々と佇^{たたず}んでいるだけである。

彼はその公園をまっすぐに突き進み、再び狭い路地にエリ力を連れ
ていった。

彼はエリ力を背負って

赤錆だらけの非常階段の前にやってきた。

この建物は6階建てだろうか。

何重にも螺旋階段が続いている。

隣の建物に圧倒されながら、

心狭そうに存在していた。

風が吹くと建物の軋む音が
彼女を歓迎するかのように低く鳴り響く。

壁には幾つもの亀裂が走り、
手すりは錆落ちてる所が多々見受けられた。

「ここだ」

彼はそう言つと

そこでエリカを降ろし、

黒い学生服の袖を少しだけ巻くし上げた。

彼は滅多に半袖を着ない。

どんなに暑い日も黒い長袖の学生服だった。

テストの日には学校に来ないのだが、

かなり強烈な印象を与え、

異様な雰囲気漂っていた。

しかし、

エリカにはその気持ち判る気がした。

彼女の兄も長袖しか着ないのだ。

彼女が幼い頃

とても暑い日があり、

一度だけエリカの兄がタンクトップを着たらしいが、

エリカがその姿を見た瞬間、

大泣きしたらしい。

彼の腕にはその時にも既に

切傷、火傷の跡、手術跡など

一生消えない傷が沢山ついていた。

彼女はそんな事覚えていないのだが、

兄が言うには
なかなか泣き止まなかったと。

そして、
その日の内に
全ての七分袖以下の袖の服を灰にしたらしい。

捨てるのではなく、
自らの手で
灰になるまで
葬り去る時の背中が

その年ではなかなか出せない
妹に嫌われた事に対する憎しみと
高かったであろう服に燃やす哀愁を醸^{かも}しだしていた
と

兄の助手から最近聞いた。

彼は妹に泣かれた事が

よっぽどシヨックだったらしく、

それ以来

彼は半袖は着ないし、買わなかった。

彼女は少しだけ負い目を感じていたので、

この夏に誕生日プレゼントとして

半袖のＴシャツを買ってはみたものの

９月になっても未だに渡せないままだった。

少しアークを兄と重ねてしまう自分が居ると
エリカは思い初めていた。

「……」

アークは帰って欲しそうな顔をしながら、
チラッとこちらを振り向いた。

エリカも流石に可哀想な気がしたが、

『趣味・探偵（追跡調査）』

としている以上、
血が騒がない訳がない。

アークには彼女の目が輝いて見えた。

すると、彼は小さな溜め息をつき、建物の右端にある階段へ向かった。

（どうせ何言っても来るだろう……？）

まさにその通りである。

彼女は何やら嬉しそうに後ろについてきた。

この取って付けたような階段は
コツコツと登る音と共に

風によってキーと低く軋む。

彼女にはいつ壊れてもおかしくはない気がした。

この古びれたアパートには各階に5つの部屋があり、
階段に近い方から1号室となっているようだ。

彼は3階の階段からの3番目、
303号室の前で止まった。

『303』とかつて白いプラスチック板の上に書かれていただろう
イタリック文字は

時と共に汚れ、薄くなり、
現在では微かに判別出来る程度である。

彼は輝きを無くして久しい

鈍く光る銀色のドアノブに鍵を差し込んだ。

ギィィ……

彼は立て付けの悪くなったドアをいつもと変わらない様子で開けた。エリカも続いて家に入る。

玄関入って正面には大きな窓があり、微量ながら夕日を取り入れていた。

そこからテラスに出ることが出来るようだ。

部屋の大半はクイーンサイズであろうダブルベッドに占拠されており、所狭しとテレビやコンポ、パイプ机が乱雑に置かれている。

左側はキッチンになっているようだ。小さな木製のカウンターがついていた。

彼は鞆を置くとキッチンに入っていく、冷蔵庫を開けた。

「コーヒー、紅茶にアイス、ホットなんでもできますが……」

「じゃあ、ホットティーで。」

彼は小さなヤカンにミネラルウォーターを入れ、お湯を沸かす。
この街の生水は飲めたものではない。

エリカは窓の外の景色が気になったので、白い薄いカーテンを開けてみた。

「綺麗……」

エリカは思わず呟いてしまった。
彼女もこの街はお世辞にも綺麗とは言えない
と思っていたのだが……。

群青色に近くなつた紫色の空の中を
黄金色の雲がゆつくりと流れ
誰も居ないビルの窓ガラスに写す――。

「そうか……？」

彼は戸棚のティーカップを出しながら言った。

「なんでよ。すごく幻想的と言うか……こんなに空が見える場所は
珍しいと思う」

確かにこの街は高いビルばかり立ち並び、大抵の家の窓からは
隣の家の壁しか見えない。

このアパートの西側は先ほど通った公園になっている為
窓側には空を遮る物は何も無かった。

「昔のこの街の姿を知っている奴はそんな事言わないさ」

エリカが生まれた時からこの辺りはこんな風景だったと兄から聞いていた。

「ミルクは？」

彼はヤカンの火を止めた。蒸気が立ちのぼっている。

「いる」

「なら、アッサムでいいか？」

「わからないし、別に構わないよ」

彼女は小さく笑った。

窓の外の景色を眺めながら。

アークは紅茶について話そうかと思ったが、止めた。

どうやら彼女は空が好きらしい。

「人間は未来の事を考えずに物事をやってしまう。
利益の方が大きいからって犠牲を物ともせず作業を進める……。
その結果がコレさ」

アークはカウンターテーブルの上にカップを置いた。

「人間は深い深い傷をこの星につけてしまった。今からどんな対策
を取ったって焼け石に水さ。
どんな事をしたってこの星は元には戻らない。」

『人間さえ居なくなればまた別かもしれないがな』」

エリカはハッと振り向いた。

彼は紅茶をすすっていた。

「まあ、軽いジョークだけれど、それは事実。
人間が居なくなれば、この星の歯車はまた違う方向へ廻りだすかも
しれない……」

彼は床を人差し指でコツコツと叩いた。

すると、大きなベットの下から黒い小型犬がヨタヨタと出てきた。

目も鼻も耳もすべて真っ黒で
垂れた黒い耳を揺らしている。

「可愛い！」

エリカはその黒い犬に駆け寄った。

「名前はなんて言うの？」

彼女は犬の頭を優しく撫でながら言った。

犬も嬉しそうに尻尾を振り回している。

アークは押し黙った。

そして、

「サ……ラス……」

とあまりにも小さな声で呟いた。

エリカも完全には聞こえなかったが、再び聞くには気が引けたので、

「へえー、『ラス』って言うんだ」

と取り繕った。

「……こいつも人間のせいだ……」

と呟くと、アークはポケットからクッキーを取り出した。

「こいつはもともと俺の犬じゃなかった。

けど、ある雨の日、俺が仕事から帰ってきたきたら

この建物の前に濡れ雑巾みたいになって倒れていたんだ。
それを助けてあげたらなついてしまった。

今ではたった一人の家族みたいなもんさ……」

ラスはご機嫌そうにクツキーをほうばっていた。

エリカは

人間用は良くないよ！

と言おうかと思ったが、台所のゴミ箱の中に

『犬用 クツキー 30%増……』

という袋が見えたので、何も言わなかった。

彼は責任を持って育てている――

そんな感じがした。

「よく考えてみると、こいつはどこから来たんだ？ 人間のところだろう。何故ここにいるんだ？」

捨てられたからだろう。何故捨てられたのか――。

家庭的な事情があつたかもしれない。もし、それだけだったら人々は捨てたりはしない。

もつと責任のある方法をとるだろう。

じゃあ、誰が？

それこそ未来の事を考えれない人間だ」

彼は空いているカウンターの椅子に目をやった。
多分、座ってもいいよ、という意味だろうとエリカは受けとった。

「その場の勢いで買ってしまったが、実はそれほど好きでもないし、世話も大変だった。もう、嫌になった。じゃあ、どうする？ 捨てよう、だ。」

自分がその身になって考えることが出来ない人間が、この……ラスみたいな奴を増やしてる」

アークは紅茶をすすった。
エリカは彼に反論が出来なかった。それは常日頃から思っていたことだったからだ。

「だから、死神がやってることは間違いじゃないよな。って最近思った」

アークはボソツと呟いた。

バンツ！

エリカは木でできたカウンターを叩いた。
置いてあったミントを浮かべたコップが波をうつ。

「違う！ そんなこと絶対に違う。死神がやっていることは悪いことなの。人間を殺すことが良いこ

との訳がない。

犯罪だよ。

あなたも狩人なんですよ？

それくらいわかってるハズ……」

アークはラスにクッキーを再びやった。

「それは人間の言い分。人間は自分達に不都合なことは犯罪と決めつける。

じゃあ、この星を汚した人間すべてが犯罪者じゃないのか？
そうではない。では何故？
自分達に利益があるからだ。

死神は人間を殺している、けど、それは死神自身の為だけではない
と思うよ」

「じゃあ、何の為よ！」

アークは大きく息を吸って、
再び喋り始めた。

「この星の為、人間の為」

アークは紅茶を飲んだ。

「死神とは実は『生死を司る神』なんだ。本当の死神はね」

「ウソの死神もいるわけ……？」

「さあな。俺は死神でもなんでもないし、わからないけど、俺が何年も死神を追ってきてそう思う

だけ。

2種類あるな……って」

エリカは初めてカップに手を伸ばし、紅茶を飲んだ。

「お、美味しい……」

アークに聞こえたかどうかは分からないが、彼は微動だにしなかった。

ラスがまだ物欲しげに足元を彷徨っている。

エリカはこの部屋を見渡すと台所の奥にひっそりと置いてある鉢植えを見つけた。

「ねえ、あれは何？」

アークは鉢植えに目をやった。

「ああ、あれは『ポプラ』だ。普通は鉢植えにしないんだがな……」

エリカがニコニコしながらアークを見ている。

「君って変わってるよ」

アークは

そうか？、と言いながら窓を見た。

「お前、帰らなくていいのか？ 兄貴が心配するんじゃないか？」

「たまには遅れて免疫つけてあげなきゃいけないの。」

この前友達とカラオケ行ってねえ、門限に30分遅れただけで助手の頭に火をつけたんだよ」

彼女は能天気な笑う。

（行き過ぎるシスコンはただの危険人物じゃねえか……）
とアークは心の底で思った。

すると、彼女は立ち上がり、鞆を持つ。

「だけど、もう1時間過ぎてるから帰らなきゃね。ご馳走様。とて

も美味しかった」

彼女はボタンと力任せにドアを閉め、行ってしまった。

階段を降りる音が聞こえる――。

彼は完全に階段を降りる音が聞こえなくなった事を確認しておもむろに立ち上がった。

部屋の右端にある大きなクローゼットを開け、黒いロングコートを取り出す。

先ほどまで居た人物がやけに騒がしかった事を感じさせるぐらいこの部屋は静かだ。

ラスの吐息が聞こえるだけである。

そして、白く長いマフラーを取り出した。

9月の夜は寒い。

まだ夏の余韻があるが、寒いには変わりはない。

一人で歩く9月の夜がより一層、彼を寒くさせた。

彼は犬用の丸い銀色の椀を台所の戸棚から取り出し、そこへドックフードを流し入れた。

「それじゃあ、行ってくるよ。
サーベラス……」

彼は大きな窓を開け、闇夜に消えていった。

黒い犬が夢中になっている椀には、

『C e r b e r u s 』

と確かに光っていた。

仕 〈シゴト〉

漆黒の闇色の空に

三日月が静かに口を開く。

星はとうの昔に輝きを無くし、

青白い月だけが遠くで笑っていた。

人々は空に星が在った事すら忘れ、

街に明るいネオンをこうこうと灯す。

街は眠る事を知らない。

否

眠る事も忘れた。

だが眠らない明るい街にも

当然の如く影がある。

光と影は表裏一体で光だけが存在するなど有り得ない。

そして夜というのは

光と影の境界線をぼやかしてしまう。

曖昧な境界線から

闇が見え隠れするのを知っている人間は数少ない。

夜は孤独である。

決して明るいものではない……。

人間は根本的なそれすらも忘れてしまったようだ。

ヒュッ——。

一人の赤い髪の男が

ビルからビルへと風のように身軽に飛び移る。

着地をしても、物音一つ立て無かった。

白いマフラーに黒いロングコートが波をうつかのようになびく。

彼は使われなくなった工場の煙突の上に立った。

彼は風になびく赤い髪を掻き分け、星空を写し取ったかのような街を見下ろす。

そして、

頬に貼っていた大きな絆創膏を外した。

彼の頬には稲妻のように走る黒いラインが絡まり合い、蛇を連想させるデザインだ。

彼も解放されたかのように

両手を上に伸ばし、少し深呼吸をした。

そして、

音もなく消え去った。

彼は、闇と共に、闇に溶け、闇こそが、仕事場である……。

そう認識していた。

——自分の足音しか聞こえない夜の暗い街は孤独だ。

人通りの多い大きな通りから
一本なかに入るだけで

静寂が支配をしている。

どんなに

『強い心を持っている!』

と人間が自負してようと、

それは何も知らない浅はかな人間がほざくことだ。
たかがの寿命でしれている。

人間は闇が恐ろしいから電気を発明した。
少しでも夜を明るくしようと考えたからだ。

夜の街は必要以上に電灯を灯し、ネオンを煌めかす――。

しかし、アークにとっては大変迷惑な話だ。
仕事^{しごと}がしにくくてしょうがない。

最近では文明が進んできたせいか、
空からも人間が人間を見張り始めた。

(おちおち屋根の上も歩けやしない……)

彼はコートを翻^{ひるがえ}し、誰も居ない街を歩く。

（久しく月影を意識した事がない……）

彼を人工的なオレンジの光が
こっとうと包み込んでいた。

生暖かい9月の風が、悲壮に満ちた啼き声を運ぶ。

啼き声は街に溢れている。

ただ、人間が聞こえないだけで。

彼は啼き声に導かれるように、
誰もいない、明るく整備された道を歩く。

回りの灰色のコンクリートのビルはひっそりと佇み、
黒い汚れが電灯によって映し出されていた。

声に導かれ、やって来た先はこの街一の総合病院だった。

大きな通り沿いにあり、辺りには珍しく緑がある。
病院の回りには何本もの大樹が植えられ、花壇は花で溢れていた。

（昼に来たら、綺麗なんだろうな……）

彼はここへ来る度にそう思うが、一度として来たことが無かった。皮肉にも夜にしか来たことが無かった。

夜にも関わらず、玄関が明るいのは緊急外来をやっているからだ。

病院の建物にへばりついている赤い十字マークが自信のほどを表すかのように

赤々と光っている。

すると、赤いラインの入った大きな白のワンボックス車が、サイレンをけたたましく鳴らし、青いランプを回しながら病院へと入っていった。

救急車は緊急外来の入口に止まった。

病院の中からは白衣を来た看護師と、親族であると思われる男性が救急車に駆け寄った。

男性は仕事場から直接来たらしく、白いワイシャツ姿に黒い鞆を震えながら持っている。

救急隊員が切羽詰まったように走りながら、患者を車から運び出す。

救急車両の中からは、口元に緑色の呼吸器を付けた5歳ほどの男児が、銀色のストレッチャーの上に横たわっていた。

男児と共に母親と思われる女性が、化粧もせず、エプロン姿で男児の名前を必死に呼びかけていた。

もう泣き叫んでいるようにしか聞こえない……。

看護師は急いでいながらも、冷静に救急隊員からの状況を把握して、手術室に運び込む。

「心拍、血圧共に落ちています！」

看護師が叫ぶ。

男児の緑色の呼吸が微かに曇っていた。

アークは少し離れたところで一部始終を見ていた。

病院関係者や家族は男児の事で必死で彼の存在などに気づいていない。

アークは遠くからであるが、
左手の掌を男児（このひら）がいるであろう、方向へ向けた。

すると、男の子の口から、うつすらと白い光が浮きあがるように現れた。

看護師達は彼の心拍数や血圧など、計器に気を取られており、男児の顔全体を見る余裕がなく、気付かなかったようだ。

白い光は、男児の身体から離れ、玄関前で泣き崩れている夫婦の上を2、3周を回った。

そして、名残惜しそくに彼らの頭上でゆっくりと消えていった。

「先生！ 心拍が完全に……」

病院の廊下に慌ただしい声がなおも響いている。

男の子の身体は手術室の奥へと消えて行った。

玄関では嗚咽おえつ混じりの母親が、夫にすがりついて泣いている。
父親もただ悲しみに暮れるだけだった。

母親はか細い声で、

「神よ、私達の息子をお救い下さい……。神よ、私達の息子をお救い下さい……」

と星もない空を見上げながら、何度も何度も手を合わせ続けた。
母親の目からは、数え切れぬほどの大粒の涙が溢れて出している。

アークは無言でその場から立ち去った。

彼らの祈りは届いたのか、
神は彼らを救ったのか、

それは火を見るよりも明らかだった。

死神には魂の乱獲について、特に決まりはない。

好きなだけ摂ればいい。
好きなだけ狩ればいい。

死神が情けを掛けていたら、この世の森羅万象が成り立たなくなってしまう。

死者の魂の解放と
生者の魂の奪取。

これが今のアークの仕事だ。

この忌まわしい左手が、彼の意味通りに魂を狩り取る。

悲しみや恐れなど、微塵もない。

と言ったら、彼の場合は嘘になる。

悲しみや恐れ、罪悪感。
後ろめたさは必ずある。

しかし、仕事だ。

彼は自分に言い聞かせていた。

彼が気丈にしていなければ、魂は綺麗に狩り取れない。

迷いもなく、冷静に、左手を差し出さなければ、両者が苦しむ結果を生む。

上手く魂が、身体から離れてくれないのだ。

アークは足早に、緊急搬送用の入口から去った後、

運び込まれた男児の両親に、訃報が告げられた。

死は悲しみを生むが、
生は悲しみの連続である……。

アークが人通りの少ない路地を歩いていると、
ひらひらと夜を舞う蝶が横切った。

人間が便宜的に分けた名前で呼ぶなら、蛾となる。

彼は思わず、見とれてしまった。

蛾は何故か人間に好かれない。

醜いからか。
あて
艶やかではないからか。

蛾はその事を理解しているかのように、日が暮れてから活動する。
まるで、人の目を拒むかのように。
自分達はチョウの一種ではないと謙遜するかのように。

蛾は日が暮れてからも、日を欲するかのように、電灯にたかる。

そこには粘着力のある糸を張って、待ち構えている捕食者がいるにも関わらず、

彼らは光を前に、狂喜染みたように舞い踊る。

光を浴びる事が出来て、嬉しいのだろうか。

人工の光でしかない事は、悲しいのだろうか。

アークは蛾が好きである。

少し自分に重なる所があるからだ。

夜の者の辛さが少し和らぐ。

人間は蝶がもがいていたら、憐れに思うかもしれない。

しかし、蛾の場合は屁にも思わない。

見下したような眼差しで、悶え^{もた}、死にゆく様を、笑いながら蹴飛ばすのを見かけた事がある。

アークは許せなかった。

自分を侮辱された気がした。

今日も電灯の周りで3つの綺麗な魂を解放した。

次生まれてくる時は、美しい姿でありますようにと祈りながら、白い光は夜空へ立ち上っていった。

この街は、月夜を覆い隠すビル群を縫うようにして細い路地が走っている。

アークは殆ど全ての路地を把握していた。

何処に繋がり、何処で曲がれば最短距離であるか、体が覚えている。

彼はそろそろ家に帰ろうと、角を曲がり、石造りの路地へ入る。

そこには錆びた配管から滴り落ちる水滴が石畳を濡らしていた。彼の辺りには涼やかな水音が、心地良く反響している。

近くの電灯は電球が切れているせいか、チカチカと不規則に点滅していた。

突然、この街に警笛が鳴り響く。頭に痛みが残るような高い音だ。

それと同時に、夜空に閃光弾が打ち上げられた。
暗い空が一瞬だけ明るくなった。

(……ッ！ 音が近い……)

彼は逃げるように走り出す。

この高い音の警笛は、死神狩人が死神発見を仲間に知らせる為に使われる物で、
同時に位置を知らせる、閃光弾も打ち上げられる。

近くに犯罪者もいるが、狩人もいる。

大抵、一つの街には一人の死神と決まっているので、自分ではない限り、例の如く、死神を名乗る犯罪者だ。

彼は早くその場から離れようと、走り出した時、前から人影がやって来るのが見えた。

彼は静かに足を止めた。

何かがおかしい……。

（俺は奴等に見つかってないのに、何故……）

自分とは違う足音がひたひたと近付いてくる。

ここで走って逃げようものなら、犯罪者の仲間と疑われかねない。

しかし、前から近付いてくる人影は、確実にアークの姿を捉えている……。

彼の焦りを表すかのように、近くの電灯はさらに不規則に点滅を繰り返す。

人影は歩を緩めず、近付いてきた。

意外と背が低い。

中学生いや、小学生と言われたら納得しそうな背丈だ。
しかし、今の時間帯を考えると小学生であるはずがない。

心地よい水音が足音によって打ち消されていく。

人影は足を止めた。

時折点滅する電灯によって、姿が浮かび上がる。

顔は緑色のキャップを深くかぶっていて、よくわからない。
服装は体より一回りも大きい長袖のＴシャツを折り曲げて、半袖の
ように着ており、
ジーンズもだっぼりと着ているのがわかった。

腕は細く、不健康そうな青白い肌を覗かせている。

風でキャップについているカンバッチがカタカタと鳴った。

「君は死神？」

幼い声が短刀直入に尋ねる。大きな瞳がきらりと光った。黄色だろ
うか。彼の瞳は一直線にアークを見つめている。

アークは答え無かった。

声を聞かれたらまずい。

秋の冷たい風が少年の方から怒濤のように吹きつける。

少年はアークの頭からつま先まで、注意深く2往復も視線を動かした。

「君、何か変だな」

と少年が一言、いや、刹那、言い終わるか終わらないかの一瞬の間に、彼はアークの背後へ、風のように走り去っていた。

アークの背中から10歩程離れた先に、白い長いマフラーを掴みながらこちらを見ている。

顔はよく判らないのだが、口一つ動かした形跡がない。笑いもしていない。

まさに『冷血』と呼ぶにふさわしい立ち姿だ。

アークの左の頬からは一筋の血が垂れた。

彼の生暖かい血が頬を伝う。

少年は刃物を持っている素振りとは全くみせていなかった。

（隠していたのか……？）

アークはコートの袖で血を拭う。
彼は全く反応が出来なかった。

（畜生。 眼も身体も鈍っていやがる……）

少年はアークのマフラーを首に巻いていた。丈が長すぎる為に、後ろは地面についている。

「これ香料の香りがする」

少年はマフラーに鼻をうずめた。

「……上質な毛だ。……大事なもの……なのかな。よくわからないや」

少年は独り言を呟きながら、マフラーを巻いた。口はマフラーに覆われ、素顔はかろうじて鼻が見える程度になってしまっている。

少年が先程見せた、人間とは思えぬ俊敏な行動。

それだけでなく、アークは少年にただならぬ気配を感じていた。少年は周りに醸し出す雰囲気すら一般人とは違った。

黒い……。
ただ黒い……。

アークは何千何億と人間に触れてきたが、このように特異な空気を取り巻く人間は類を見ない。

「……ハハハ」

アークは真つ暗な夜空を仰ぎ見ながら、高らかに笑った。少年が表情を変えずに、ピクリと動いた。

（少しは骨がありそうだ……）

アークは頬から滴る赤いの鮮血をペロリと舐めた。

何故その時アークが笑ったのか。

それは彼自身もよくわからなかった。
ただ、気分が良かった。
長い間この感覚を待ちわびた気がした。

自らの鼓動が楽しそうに脈打ち、手足が興奮のあまり震えている。
頭の中に長年の間こびり付いた眠気が無くなり、大草原の風のようにすっきりと爽やかだ。

このような体験が久しぶりだった。

（もう少しで全てが錆び付くところだった……）

アークは赤い目を輝かせながら、楽しそうに笑った。

「君、面白いね」

少年は右手でつばを押さえ、更にキャップを深くかぶった。

銃声や怒号、大勢の足音が聞こえるようになり、付近が騒がしくなってきた。

例の捕り物も最終段階に入っているようだ。

アークは少年の声に喜怒哀楽が全く感じられず、少年の心情が全く読めない。表情もわからず、まさに空を掴む感じだ。

何処から飛んできたのかわからない落ち葉の群れが、冷たい風に乘ってアークの足音に絡み付く。

少年はズボンの裾を折り曲げた。

腕と同様、青白く、細い無駄のない脚があらわになった。

点滅していた電灯の光る時間がだんだんと短くなり、暗く沈黙する時間が長くなった。

そろそろ切れるころだろうか。

……ジ。

遂に電灯が力尽きたような音を発し、辺りが完全な濃い闇に包まれた。

ただ、遠くで指示を出す声と、からからと風に舞う落ち葉の音しか聞こえない。

突然、強い風が吹き、空き缶だろうか、何か硬い塊が電灯に当たり、軽い音が響いた。

そして、電灯は息を吹き返したかのように、再び明かりを灯し、薄汚い路地を照らす。

しかし、そこには先ほどまでいたはずのアークの姿が忽然と消えていた。

少年は辺りを見回し、両側から迫りくる煉瓦造りのビルの一

つにゆつくりと目をやった。
屋上に人影が見える。

そこには、アークが自慢気に自分のマフラーを掴み、少年を見下ろしていた。更によく見ると、アークの頭の上には少年の緑色のキャップが軽く乗っている。

風になびく長い黒いコート。白いマフラー。赤い髪。
キャップのカンバッチがカタカタと微かに鳴った。

少年は帽子を取られたせいで、掻き上げていた長い前髪が目にかかっている。

かろうじて大きな茶色の瞳がこちらを覗いていた。
顔自体は小さく、小さな鼻が幼さを強調しているようだ。

「あと2cmだったんだけどな」

少年の茶色い瞳が力無く呟いた。

アークは無言で、少年のキャップをゆつくりと投げ落とした。
落ちるキャップは風を掴み、まるで空に舞う木の葉のように、ゆらゆらと落下した。

帽子が静かに地面に着く頃には、アークの姿は闇に消えていた。

少年は暫くの間、屋上を見つめ続けていたが、近付いてくる足音に気付いたので、視線を外した。

そして、乾いた石畳の上に落ちている帽子を大事そうに拾い上げる。

「ジン君、君でも獲物を逃がすなんて事があるんですね」

奥から男の声がし、少年が振り向くと、右手には白い拡声器を持った20代前半ぐらいの若い男が現れた。

「ヨウラクさん……」

ヨウラクと呼ばれるその細身の男は、灰色の髪の毛に、黒淵眼鏡をかけていた。眼鏡の奥には少しやつれたような栗色の目があり、目の下にはうっすらと隈が出来ている。

「……ヨウラクさん、丸腰の死神っていらっしゃいますか？」

辺りを見回していたヨウラクはジンの方を向き、ずれていた眼鏡をあげた。

「興味深い話だね」

そしてヨウラクはジンに歩み寄り、少年の黒く長い前髪を掻き分けながら、

「しかし、君がその眼で見たのなら、本当なんだろう」

とジンの目の下伸ばしながら付け足した。

彼は白衣だろうか。白い服を身につけ、学者のような格好をしている。

そうですか、とジンは答え、キャップについた砂を丁寧に払い、再び帽子をかぶった。

その様子を見ていたヨウラクが、

「ジン君、今日はなんだかいつもより嬉しそうだね。獲物を逃してしまったのに」

と微笑みながら話しかけた。

ヨウラクの声は何処か温かい。包容力があると言っのだろうか。

ジンは表情を変えず、

「そうかな……。でも、わくわくする……。って言っのかな？ よくわからないんだけど、僕と同じ仲間を見つけたんだ」

ジンはヨウラクの方を向き、

「夜が大好きで大好きでたまらない仲間を――」

ヨウラクはまるで子供を見守る親ように楽しそうに笑った。
幼い子供の拙い説明に優しく相槌を打ち、頷いている。

「そっか。それは丁度良かった。私も残念ながら獲物を逃したところだ。共にわくわくしようじゃないか！ 今宵は楽しい夜だ！」

ヨウラクは笑いながら背を向け、歩いていつてしまった。
彼は楽しそうに拡声器を回している。

ジンはもう一度、アークが消えた屋上に目をやった。
そこには、ひびが左右に大きく入っているだけだ。

「……ほんと、楽しくなりそうだ……」

ジンはそっと呟き、ヨウラクの背中を追いかけた。

風がその言葉を押し流すかのように冷たく走っていった。

兄 〈カゾク〉

「…………あいつは何かがおかしい…………」

アークはボソツと呟いた。
昼下がりの近所の公園、いや広場で、彼はたった一つしかない木製のベンチを占領している。
来客も滅多に來ないので気にする事もない。

この3日間ずっと『あの少年』について考えていた。
頭から離れてくれない。
離れそうもない…………。

ラスはかつてブランコがあっただろう付近で赤いトンボを楽しそうに追いかけている。
真っ黒な尻尾が忙しそうに右へ左へと揺れていた。

網を振り回せば、必ず捕まえらるであろう数のトンボが辺りを飛び回る。
そのトンボの透き通った羽によって乱反射する太陽光。
更に光に包まれる広場。

その光景はアークに季節の流れを感じさせた。

もう、何度目の季節だろうか。

あれから幾つの季節が巡ったのだろうか。

彼は木製のベンチに座りながらぼんやりと考えた。
青さを失い始めている雑草が風に揺れる。

まだほんのりと木の香りが残るベンチ。

ここは彼のお気に入りだ。

ここでするひなたぼっこは最高に気持ち良く、うとうとするのが
堪らなく好きだった。

「時代のうねりは止まる事はない、か……」

アークはクシュと赤い髪の毛を掴んだ。

彼は出席日数の最低ライン分しか学校に行かない。
行かない日はたいていここで微睡まどろんでいる。

昼間は何もしない。

彼は自分で決まりを作った。
それもごく最近に。

「貴女はこんな私を見て、どう思っているのでしょうか？」

その時、冷たい風がアークの頬を撫でた。

しかし、その風は瞬く間に灰色のビルの間に消え、何事も無かったかのように、トンボが飛び回る。

雲が流れ、彼の赤い髪が揺れる。

彼は自分の頬の絆創膏をなぞった。

どんなに時の流れに抗おうとも、世界は廻り続ける。
あらが

彼は解っている。

十二分に理解をしている。

しかし、それは時として残酷なものだ――。

すると、くすんだビルの隙間から足音が聞こえた。

ローファーと石畳が奏でるステップが楽しそうに、どんどん近付いてくる。

鼻歌混じりの足音は、彼を無理矢理、現実の世界へ引き戻した。

「狩人ズーホム、世界を守る」

「死神ルーパーン、世界を壊す」

「集おう、正義の名の元へ」

「叫べ、ジャステイス！」

「歌え、ジャステイス！」

まだこの卑猥な歌は続くらしく、再びAメロに突入した。

「……また、あいつか……」

アークが薄目を開けた見た先には、女性がやってくるのがわかった。青が基調となったタータンチェックの短めのスカートは、歌に合わせて揺れている。

あれは彼の学校の制服だ。

「ねえ、どうして学校に来ないの？」

エリカは彼の前で立ちはだかった。

彼女はアークの顔をしげしげと覗き込む。

彼は目を閉じ、寝たふりをしていた。目蓋の裏に彼女の黒い影がゆ

らゆらと動いている。

風に吹かれ、彼女の爽やかな香水がほんのりと香った。

「寝てるのかな？」

黒い影は香りと共に徐々に遠ざかっていく。

アークは少し安堵し、このまま何もなく帰ってくれる事を願った。

と、その時。

彼の脚に絡み付くように通り過ぎるケダモノの感覚が彼を襲った。

彼は思わず飛び起き、辺りを見回す。

（この感覚はサーベラスのものではない……。と、いうことは……）

「あ！ やつと起きたね。どうして学校に来ないの？」

エリカは遠くでサーベラスと戯れていたようだが、顔を上げ、ベンチの方を見ている。

しかし、アークはエリカの問いに全く反応を見せず、必死に不快の根源を探す。

アークがベンチの下を覗き込むと、一匹の白い猫がニャーと鳴いた。

彼は右手で鼻と口を押さえながら、白い猫をベンチの下から追い払

う。

その光景を一部始終見ていたエリカが、追い払われた猫を抱き上げ、アークの方へと近付いて来た。

「実は君……猫嫌いでしょ！」

彼女が笑いながら白い猫を彼に近付ける。

「だっ……それ以上は……」

ハックシュン！

彼の口から大きなくしゃみが飛び出した。

彼は頬を真っ赤にしながら、溢れ出るくしゃみをこらえようとしている。

彼のくしゃみは止まるところを知らず、次々と飛び出す。

「クシュン！ 俺は……猫アレルギーなんだよ……ハックシュン！」

彼女は笑いながら、猫を遠ざけた。アークにポケットに入っていたティッシュを差し出すと、奪い取るように鼻をかみ始めた。

しばらくすると落ち着いてきたのか、くしゃみの頻度が少なくなってきたようなので、

エリカがおもむろに口を開いた。

「猫、嫌いだったんだあ」

彼女は意地悪そうに微笑み、以前、取り出した事のある古ぼけた手帳に何やら書き始めた。

「意外だったナ……。君が猫、苦手なんて」

「はあーあ。猫アレルギーかあ……」

「だから、猫が嫌い……と」

彼女がニイーと笑う。

明らかに嫌がらせで連呼している。

「あー、もうそれ以上言うなって！ ラスを噛み付かせるぞ！」

アークはティッシュを鼻に当てながら答えた。

ラスはそんな事しないよね、と言わんばかりにエリカはラスに駆け寄る。

ラスも嬉しそうに尻尾を振り回していた。

「元気そうじゃないですか。風邪だって聞いて心配してたのに」

エリカは手帳を仕舞いながら訊ねた。

白いブラウスに青いリボンの制服が学校帰りであることを物語っている。

「んあ？ あー治った」

勿論、嘘である。

学校に行かない、行きたくないが為の都合の良い口実だ。

「じゃあ、ヒマだよねっ！」

彼女が楽しそうな笑顔で素早く振り向いた。

彼女の大きな二重がこちらを見つめる。

「兄が君に会いたって」

遠くで木の葉が風に舞い、トンボが気楽そうに飛び回る。

『人間と関わりと良いことがない』

まさにその通りだと、アークはつくづく感じた。

「しかし、忙しいだろ？ 迷惑はかけさせたくない」

アークはどうかしてでも、彼女の兄には会いたくなかった。
敵の懷に飛び込む馬鹿な真似は避けなければならない。
彼の心臓の鼓動が速まるのが分かった。

「大丈夫だよ。いつも机の前で、ジグソーパズルを組み立ててるだけだからさ」

エリカが彼の目を見つめる。

「ねえ、会ってあげて」

アークはいままで味わった事のない感覚に襲われた。

いつからだろうか。

人間に対して、このように感情を持つようになったのは。

感覚が麻痺してきた、と言っただろうか。

身体だけじゃない。

心も。

甘い蜜が全てを狂わしてゆく……。

エリカは辛そうな悲しい目をして、アークの赤い瞳を覗き込む。彼女の目はいつだって真っ直ぐだ。

「あー分かった！ そんな目で見るな」

アークは赤い髪を掻き上げながら、立ち上がった。

「え……ホントに？ ありがとう！」

彼女の弾けんばかりの笑顔がこちらに迫ってくる。

エリカの笑顔は決して上品だけではない。

エネルギーシユなのだ。

相手に元気を与える笑顔――。

アークはどうも、この笑顔に調子を崩されているような気がしてならない。

正しくは、『弱い』というのだろう。

（フリーの狩人の憧れの存在であるW・E・D・Aの幹部……。自分もその設定でいくか……）

素直になれない自分にアークは気付き始めていたが、
そう思う度に、彼は彼自身を嘲笑いたくなった。

『まだ理解していないのか』

何十年経った今でも響き続ける。

（もう、二度と繰り返してはいけないんだ……）

彼は、あの時、あの丘で、誓った言葉を思い出しながら、エリカの家へと向かった。

この世界は大半が無機物で構成されている。

58%の灰色コンクリート。

23%の錆色の配水管。

11%の鈍色に反射するフェンス。
たった7%しかない真っ白な小さな幸せ。

そして、微量の黒いスス、

崩れつつある秩序。

いずれ、
黒いススが真っ白な幸せを、あつという間に、飲み込んでしまっ
ろつ。

それほど世界は濁っている。
濁っている……。
キタナイ……。

「ここだよ」

エリカが振り向き、建物を指差す。

エリカの声でアークは現実に戻され、辺りを見回した。

するとそこには、少し薄汚れた雑居ビルが並んでおり、どうやらこ

のビルの中が彼女の家兼事務所らしい。

アークの家からいくつもの路地裏を通り抜け、大きな通り沿いを暫く歩いた先にあるようだ。

しかし、その建物は指差されなくても判るほど、色とりどりの看板や幟^{のぼり}が立ち並んでいた。

『狩人募集中!』

『気軽に相談を!』

中でもビルの真ん中あたりには

『W・E・D・A 第39支部

怪しいと思ったら、

今スグ相談!』

と金色で浮き上がっていた文字が神々しく光っていた。
夜になったらライトアップされるらしい。

「君ってさ、人の話を聞いてないよね」

エリカが面白くなさそうな顔をしながら、少し古めの自動ドアの前に立つ。

彼は一步後ろで止まる。

（ここで中に入ってしまったえば、幹部に会うまで出られない、か……）

アークの足が少し躊躇する。今頃になって、あの笑顔に負けた自分を後悔していた。

しかし、今逃げ出したりなんかしたら怪しまれない方がおかしいだろう。

「だって意見を求めても、ずっと一点を見つめて、怖い顔してるの」

曇りガラスの自動ドアの先には、赤い絨毯が一面に敷き詰められていた。

受付嬢のいない受付を素通りし、正面にあるエレベーターに乗り込む。

左にある大きな部屋からは、煙草の香りと男性の喋り声が幾重にも重なり合って聞こえた。

彼女が慣れた手つきでロックを外し、『5』という階数が押され、エレベーターが上昇する。

（エレベーターにロックがかけられるという事は、2階以上は関係者以外立ち入り禁止か……）

アークは古ぼけた文字盤を見ながら考えた。

「ほらね」

エリカが呆れたように頬を弛める。
すると、安っぽい金属音が５階に到着した事を告げた。

金属のドアが左右に開くと、正面に檜の木だろうか、重厚な茶色の扉が構えていた。

この階も１階と同じく、廊下には赤い絨毯が敷き詰められている。
この階にはこの扉しかないようだ。

コンコン。

エリカが扉に近付き、ドアをノックする。

「兄さん。入るよ」

彼女は金色のノブを捻った。

アークは心の角で願わくば、鍵が掛かっている事を願った

が、

その思いは脆くも崩れ去る。

その扉は抵抗する事なく開いた。

エリカの後に、アークが部屋に足を踏み込む。

入って、まず目についたのは、檜の木で作られた大きな大きな長机だ。

広い部屋の正面にどん、と居座っている。

更にこの部屋は三方向を本棚で囲まれており、右側は全面ガラス張りになっていた。

傾きかけた夕日を取り込んでいる。

しかし、そこに人影は無かった。

「もう、兄さんったら……」

エリカが小走りで、机の後ろに向かった。アークは微動だにせず、ドアの前に立っている。

「兄さん！ パズルは引退してからって言ってるでしょ？」

エリカの怒鳴り声が響く。ガラスの窓に振動が走った。窓からは微かに夕焼けが見える。今日も綺麗な橙色だ。

「分かった分かった」

机の裏から、全くやる気を感じられない声が嫌そうに答えた。

「分かった分かった」って言って、もう何日目だと思ってるの！
7日目だよ！書類が溜まりに溜まってるのに……」

「正しくは8日目だけどね」

机の裏から溜め息と共に発せられた。
どうやらエリカの火に油を注いだようだ。

「兄さん！！もっと真面目に仕事をしなさい！エイドさんに迷惑掛け過ぎだよ。書類の仕上げを全部人任せにして……」

エリカの罵倒は続く。

話の内容からするに、エイドとは古くからの助手らしい。

「だから死神が捕まえられないんだよ。この前だつて突入したものの、逃げられた後で蛻の殻もめけだったんでしょ？これだからこの街から死神が減らないんだよ！」

エリカが溜め息をつく。

「絶対、兄さんよりアークの方がよっぽど頼りになるよ」

「またその子が……」

パチツとパズルがはまる音がした。

「まあ、今来てるんだけど……」

すると、机の影からスラツとした長身の男が立ち上がった。
黒淵の眼鏡をかけ、白衣を着ている。少し目がやつれているようだが、兄妹でそっくりだった。

「よく来たね」

彼はアークに微笑みかけ、椅子を引き、ゆっくりと腰掛けた。

「エリカ。コーヒー2つ」

エリカは露骨に嫌そうな顔をした。
それもそのはず、彼女は既に手帳を取り出し、メモの用意をしていたのだ。

しかし、彼女も場をわきまえたようで、無言で部屋を出で行った。

部屋にはアークとエリカの兄の二人だけになった。

「どうも、あの子はカリカリしていてね。私には私のペースがあるんだが……」

彼は何かに気付いたように眼鏡を上げた。

「ああ、自己紹介が遅れたね。私の名前はヨウラク。名字は煩わしいので覚えなくていいよ」

彼は優しく微笑みながら、答えた。

ここでは幹部とは名ばかりで、支部長という事務の仕事に追われてばかりさ、とヨウラクは愚痴っぽく付け足した。

アークはもう少し、がたいが大きい人を想像していたが、頭が小さく、ひよろりとしているので拍子抜けしてしまった。

「さて、君はフリーで狩人をやっている……？」

「アークです」

アークはきっぱりと答えた。

（自分を偽って見せるのは馴れている……）

エリカが居ないせいか、彼はどこか吹っ切れた感じがした。
しかし、相変わらず掌は汗で湿っている。

ヨウラクの目がアークを確実に捉えて離さない。

「ああ、そうそう。君も名字名乗らない派なんだ。私は嫌いじゃないよ、その名前。素敵だ。覚えやすい」

ヨウラクは机の引き出しを開け、書類を取り出した。彼はパラパラと捲りながら訊ねる。

「君は西のエリュシオン出身なんだね。若いのに大変だっただろう」

エリュシオンとは以前、アークが身を留めていた場所だ。

平和で穏やかな平原が広がる地域だったが、50年前より内戦が始まり、現在は泥沼状態になっている。

アークは公の（人間の目に触れる）文書にはエリュシオン出身と書

くようにしていた。

彼は少し沈黙をおいて、

「……いえ、大丈夫です。歴史とは負の部分しか記録として残らないので当然かもしれません」

と、うつむきながら、静かに答えた。

アークの顔に赤い髪が覆い被さる。

ヨウラクは真顔で暫く黙っていた。

そして、彼は机の上に肘^{ひじ}をたて、手を組み、アークに優しい口調で話しかけた。

「それは事実だね。人間は醜い部分ばかり記録に取りたがる。この日常の方が重要だってのにね」

アークの方見ながら言葉を続ける。

「ああ、でも、まあ私はそれ以上は何も詮索しないさ。君の背負っているものは私のよりも重そうだしね……」

ヨウラクは眼鏡を上げて、目を細めた。

彼の声は優しい。だが、優し過ぎるが故に恐怖を覚える。
そして、何処か抜けているように見えるが、それは演技ではないか、
とアークの中で疑念が渦巻く。

『彼は危ない』

アークの直感が警鐘を鳴らす。

あの目は全てを飲み込むような気がしてならない。
彼の目は危ない。

「しかし、それが君を変えた」

アークは素早く顔を上げた。ヨウラクは微笑を浮かべている。

「当たり前……だね」

ヨウラクの灰色の髪が微かに揺れた。

「逃げて逃げて逃げて……辿りついたのがこの街か。なんの因果だ

ろうね……。

この街はなんと呼ばれているか知ってるかい？」

アークは答えなかった。

強者の前では無知で偽るのが得策だ。

「ヴァイシヤリ。それがこの街の俗称……」

「旅の終わりの街……か」

アークは窓の外の景色を眺めた。

昔、紡績産業で栄え、栄華を極めた街の成れの果ての姿がガラス越しに横たわっている。

「そう。世間からのはみ出し者達が集まってくるのさ。勿論、死神もね」

ヨウラクは妖しく笑った。

アークは無言で部屋の中へと視線を戻す。

しかし、敢えてヨウラクと目を合わそうとはしなかった。

「君だってそうだろう。その歳で狩人をやっているのだから」

狩人と名乗るには簡単な国家試験を受け、政府から認めて貰った証にライセンスを受け取る。

現在、犯罪が急増し、狩人の人手が足りないのが事実で、精神的に問題さえが無ければ、誰でも合格した。

だが、大抵の親は子供に一般の職業について欲しいと願うため、狩人のほとんどが訳ありの曰くつきの人ばかりであるのは事実だ。

ヨウラクは大きく溜め息をついた。
しかし、落胆の色は全く見えない。むしろ楽しそうだ。

「ここだけの話、私は読心術に長けていてね。大抵の人間の思考は理解することが出来るんだよ

……ただし、“人間” だけだが」

彼は机の上にあつた資料を手に取り、迷う事なく、2つに裂いた。

「……私は使えない人間と、思考を読ませてくれない人間が虫酸が走るほど嫌いだね。無論、君の事は大嫌いだ」

紙切れとなったアークの偽りだらけの個人情報、乱暴にごみ箱に放り込まれた。

ヨウラクは笑顔だが、目だけは笑っていない。

「さて、君の話を聞かせて——」

と、ヨウラクが全てを言い終わる前に、突然、この部屋の扉が開いた。

「兄さん？ どうしたの？ そんな大きな声出して。珍しいね」

エリカが銀色の盆の上にコーヒークップを2つ乗せてやってきた。白いカップからは湯気が立ちのぼっている。

「あ！ ゴメン、立ちっぱなしだったんだ。今、アークの椅子持ってくるから！」

と言うと、エリカは銀色のお盆をヨウラクに乱暴に手渡し、足早に部屋を出て行ってしまった。

「エリカ！ 両手が塞がってもノックぐらい……」

ヨウラクの声は無情にも届くことはなく、全てを言う前にエリカは扉を閉めてしまっていた。

ヨウラクが小さな溜め息をつく。

この部屋には、机と本棚とヨウラクしか存在していないと言ってもいい。

この部屋には一切の無駄が無かった。

ヨウラクらしい、と言つべきか。

小さな溜め息は、虚しく部屋中に響いた。

「さて、君は砂糖を……」

彼はエリカが入ってきたせいか、アークを追求する気が失せたらしく、他愛もない方向へと、話題を変えた。
アークには都合が良い。むしろ救われた。

どうやら、ヨウラクは飽きっぽいらしい。
いや、気分屋というのだろうか。掴みどころがない。
しかしこれが性格なのか、演技なのか判断がつかない。

コツコツ。

今度は礼儀正しく、優しく扉を叩く音がした。
明らかにエリカとは違う叩き方だ。

「ドウゾ」

ヨウラクは砂糖をすくいながら、面倒臭そうに答える。

すると、重厚な扉が開いた先には、小学生ほどの少年が立っていた。

アークは軽く会釈をし、冷静を装おうとした。
しかし、彼の胸はキリキリと絞めあがっていく感覚に襲われた。

この余りにも青白い肌をアークが忘れる訳がない。

この余りにも黒い雰囲気を忘れるはずがない。

明らかにあの時の少年だ。

相変わらず、緑のキャップには沢山のカンバッチを付けていて、動く度にカタカタと鳴った。

少年はあの時と変わらず、無表情で立っている。

「エリカ……姉ちゃんに言われたから持ってきた」

少年は無愛想にも片手で黒みがかった茶色の椅子を引きずりながら入ってきた。

椅子にはキャスターも付いてない、木で出来た本格的な四脚だ。

「ありがとう。ソコに置いてくれ。アーク君はソコに座ってくれて構わないよ。えっと、ジン君。キミはまだココに居てくれ」

ジンはアークの後ろに椅子を置き、自分はアークの隣に立った。

しかし、アークには元々座る気などさらさらなく、ずっと立っていた。
椅子に何か仕掛けられているかもしれないし、急に襲いかかられても逃げやすい為だ。

「この子はね、とても優秀な子なんだよ。
……死神を捕まえるのがね」

ヨウラクは眼鏡を上げた。

「まあ、大抵の狩人よりは十分な成果を出すと思うよ」

アークがさりげなく横目で見ると、無表情の、例のあの顔が貼り付いていた。

（喜ばねえな、ホント……）

アークは少し、ジンに違和感を感じていた。
感情が欠落しすぎている。

通常の間では有り得ない事だ。

「ちなみに君と同じクラスだったと思うが……」

ヨウラクが言葉を続ける。

「俺、高校2年ですけど」

「僕も１７だよ」

声変わりをしてない声が、眉一つ動かさず答える。
ヨウラクは少し笑った。

「無理もないよ。だって身体が小さいもの」

後ろで声がし、振り向いてみると、エリカは白い皿に色とりどりの
お菓子を乗せて、微笑んで立っていた。

「帰る」

アークはコートをはためかせ、ヨウラクに背を向けた。

「え？ もう、帰っちゃうの？ ちょっと待ってて、途中まで送る
から」

とエリカは言うのと、持ってて、とジンに皿を預け、忙しそうに出て
いった。

「ふう……相変わらずだな。さて、話し易くなった所で、ジン君が

ら聞こうか」

ヨウラクがコーヒークップにミルクを入れる。
コーヒーの色が変わっていく。

「君達は学校以外で会ったことはあるかい？」

「ないです」

ジンが声色を全く変えず、即答した。

アークは少し驚いた。

いや、絶対会っている。

ヨウラクは微笑みを浮かべながら、そうかい、と答えた。

「では、アーク君。ジンを見ての率直な感想を聞かせてもらおうか
……」

アークは振り向き、赤い目を細めながらジンを見つめた。
そして、徐々にヨウラクへと視線をずらしていく。

アークは初めてこの時に気付いた。
そして後悔しざるを得なかった。

（どうして今まで気付かなかったのか……。まるで、愚の骨頂ではないか……）

『身体が鈍っている』
としか言い様がない。

「愚かで悲しい」

と、アークが吐き捨てるように言い残し、部屋を出ていった。
ジンには、扉の閉まる音がやけに重く、そして低く感じられた。
そして、ヨウラクが静かに、コーヒーを口に含ませた。

「愚かで悲しい……か」

ヨウラクは噛み締めるように反芻^{はんすう}し、砂糖を更にもう一杯掬い上げた。

「ヨウラクさん。19時よりお隣の支部のトライバル氏との定例会食が予定されています」

ジンは色とりどりのジェリービーンズを乗せた皿を持ちながら、ヨウラクの方へと近付いた。

ヨウラクは無言で砂糖をコーヒーの中へと溶かしてゆく。

「糖分の摂りすぎは身体に良くないですよ。……なんだか今日のヨウラクさん、らしくない」

ジンは少しだけ心配そうな声を出し、ヨウラクの机の上に皿をゆっくりと置いた。

「それに……僕は慣れてますから、気にしないで下さい」

ジンは静かに眩き、帽子を更に深く被った。

「ジン君。

世界には酸っぱいくて、辛くて、苦くて、最悪なモノばかりで溢れている。

だけど、そんな世界をいつまでも受け入れていちゃあ駄目だと思うんだ」

ヨウラクは砂糖をもう一杯掬った。

彼の声は明るかったが、ジンには少しだけ、わかるような気がした。

苦い世界。

ヨウラクもエリカも、この世界を少しでも変えようと、狩人の世界飛び込んだ。

ジンも何かを変えたかった。

少しでも自分の運命に抗う^{あらが}為に、ここへやって来た。だけど、それは叶わぬものだった。

「確かに今日の私は取り乱してしまった。あんな支離滅裂な攻め方、私らしくない……。いつもの私は、もっとえげつない」

ヨウラクは自嘲するかのようにつつた。

「ジン君。今回は難しい仕事だけど、受けてくれるかな？」

「勿論です。僕には断る理由がない……」

「フフ……、いい子だね」

誰かに必要とされる存在。

それだけで、ジンは嬉しかった。

ジンには、いつもの赤い絨毯が少しだけ、鮮やかに見えるような気がした。

神 〈シニガミ〉

アークはヨウラクの部屋を出てから、長い間エリカの愚痴に付き合
わされ、
解放されたのは日が落ちてからだった。

「少し、喋り過ぎたか……」

アークが見上げると、星一つない真っ黒な空が迫って来ていた。
街は光を灯し、次の季節の到来を待ち構えている。
彼がうつ向くと、黒いスニーカーの汚れが電灯に反射し、少し光っ
た。

アークは湿った路地を抜け、軋むアパートに向け、歩を進めた。
いつ見ても汚らしいアパートだ。
しかし、そのうち綺麗に見える日が来るのだろうか。

「ハハ……、馬鹿みたいだ」

そんなはずがある訳がない。

この錆が取れない限り、このヒビが無くならない限り……。

アークが自分の部屋の前に立つと、

ドアと床との小さな隙間に赤い封筒が挟んである事に気が付いた。

彼は無言で拾い上げ、いつものダイレクトメールのように、コートの内ポケットに滑り込ませる。

鍵を開けると珍しく、サーベラスが立っており、

撫でようとすると、胸の内ポケットが気になるのか、頻りに匂い^{しき}を嗅ごうと鼻を伸ばしていた。

「一緒に見るか……？」

アークはキッチンカウンターの上にあったライターを持って来て、火を付けた。

蛇が絡み合う様子をあしらった黄土色の封蝋を、ゆっくり溶かしてゆく。

すると、封筒の中には厚手の高級そうな赤い紙が一枚だけ入っていた。

親愛なる H a d e s .

アーク^{II}オブヴェイン 閣下

今回は

苦悩の川 アケロン の畔^{ほとり}

G - 3 4 地点の廃ビルにて
お待ちしております。

日時： 9月4日 23：45～

お時間をお守り下さいますことをお願い申し上げます。

忘却の川 レテ に流されませぬよう、十分お気をつけ下さいませ。

Sheol・（シェオール）

アークは一通り読み終わると、丁寧に紙を封筒に戻し、ライターへと手を伸ばす。

先程、封蝋を溶かしたライターで宛名の無い赤いそれに火を付けた。すると、あっという間に火は燃え広がり、灰すら残らず、空中で霧散した。

これは死神界からの封書――。
通称・赤紙（アカガミ）
という。

人間界に証拠が残らぬよう、灰すら残らない細工がしてあった。

「今日か……」

彼は窓の外を眺めながら、静かに頬の絆創膏を摩^{さす}った。

そして、小さな溜め息を一つつくと、急に動き出し、クローゼットの戸を開ける。

アークはクローゼットの奥から、いつものではない、正装らしい小綺麗なコートを取り出した。

「……今日の仕事着」

とサーベラスに話しかけると、今まで着ていたコートを脱ぎ、取り出した物に袖を通す。

少しいつものよりも、黒が深く、濃いのが特徴だ。

「身体、変わってねえな」

サイズは丁度良く、とても似合っていた。しかし、アークは手放しで喜ぶことが出来ない。

そうこうしているうちに、時間が迫って来た。

今日の仕事もこなさなくてはならない。

「行ってくる」

彼は足早に自室を後にした。
今日もまた、アークは闇の中へと消えていってしまった。

G - 3 4 地点。

これは死神の間のみ通用する暗号だ。
街を碁盤の目のように区切り、その中の一区画に過ぎない。

川の名前にも特に意味はなく、
部外者に勝手に読まれた場合の、相手を混乱させる為だと思われる。
まあ、なんとこざかしい。
人間の作り出した神様を紛れ込ませて、自分達の神話性を高めているのだろう。

すると、アークの靴がキュツと鳴った。
石畳は湿っていて、所々苔が生えている。
路地はガタガタで、道から飛び出しているビルもあれば、一歩奥まった所に建っている物もある。

その路地裏の中で、最も落書きの凄まじい倉庫の前に、一段と細い長いビルがあつた。

普段なら気付きもしないビルだろうが、今日は違う。

大男が二人、入り口で待ち構えているからだ。

二人とも真っ黒なコートに身を包み、色黒な顔、そして極めつけはスキンヘッド。

はたから見れば、危ない取引現場に見えないこともない。

「アーク様。お時間をお守り下さいますよう、あれほど書かせて頂きましたのに……」

一人の男はアークを見つけると、控えめに口を開いた。
しかし、アークは悪びれる様子もなく、

「悪い。俺、紳士だからよ」

と答え、もう一方の男によって開けられた扉の向こうへ、スタスタ入って行く。

しかし、扉の向こうはこのビルとは違った。

目の前は青白い光で溢れており、床からは燃えてような青白い炎が、ゆらゆらと揺らめいている。

これを死神達は“穴”と呼び、死神界と人間界を結ぶ、唯一の物だ。しかし、この“穴”は死神の中でも、そう簡単に作れる代物ではない。

作る事が可能なのは、
3人だけだ。

アークは迷う事なく、円の中へと足を踏み入れた。

すると、炎のような青い光が一瞬にして彼を包み込み、あっという間に、その場から彼を消し去ってしまった。

アークが消えた後、“穴”は再び落ち着きを取り戻し、ちらちらと揺らめき始めている。

「来おったか……」

アークはしわがれた老人の声に気付き、目を開けた。しかし、辺りは真っ暗で確認しようがない。周りからは多くのざわめきが聞こえてくる。

「お待たせして申し訳ありませんでした。しかし、私はあなた方のような暇人でない事をご留意頂きたい」

アークは少し大きな声で、皮肉っぽく擲^{ちやく}揄^うした。

すると、ざわめきが凍りついたように消え、突然、彼はスポットライトのような光に照らされた。

先程の“穴”と同じぐらいの大きさだろうか。彼だけピンポイントに光を当てられている為、周りは伺い知ることが出来ない。

「やっと来たと思ったら、なんという言い草だ。いい加減にしろ！」

「神様が居られるというのに、何度目の遅刻やら……」

先程とは違う老人の声だ。

アークはこの二人を知っている。

だが、名前など忘れてしまった。

否、

覚える気などなかった。

“穴”を作る事の出来る実力者だ。しかし所詮、生にしがみつく事にしか興味のない老獠ろうかいでしかない。

「まあまあ、二人とも落ち着きなされ」

しわがれた、落ち着きのある声が二人をなだめる。

彼こそ、死神様、皆から『神様』と呼ばれる人物だ。すると、周りから汚い野次が飛ぶ。

くだらない、愚か者ども。

一人で齒向かう事も知らない負け犬が。

アークは心の中で叫ぶ。

アークも以前は向こう側にいた。

しかし、とてつもなくくだらない権力争いだとか、派閥抗争だとかに嫌気が差し、今の世界にいる。

「皆の衆も落ち着きなされ。奴は賢い。何故、自分がここに喚ばれたか十分に理解しているはずじゃ。なあ、ハーデイス」

闇が話しかけてくる。

向こうからはアークの全てがお見通しなのだ。

「知らねえよ。老人の考えることなんざ、興味ねえ」

アークが吐き捨てるように言うと、

「貴様！ 誰に向かってそんな口を聞いておる！」

と、三人の内の一人が怒り出し、周りも野次り出した。

「しかし、神様。奴自身も感じているはずですよ！」

神様は一つ大きな溜め息をつくで、周りの衆愚どもは、瞬く間に口を閉じた。

「突然じゃが、ハーデイス。近頃、お主がおかしい、という報告が入ってな。

勝手にこちらで調べさせて貰った」

というと、もう一人の老人が読み上げるように話し始めた。

「1ヵ月でお前が回収した魂は、ネコ 96個、イヌ 51個、その他小生物 187個、ヒト 48個……」。

ヒトの魂の約80%が60歳以上の高齢者であること。

例外である6歳少年の詳細を調べてみると心臓に重い病気を抱えており、多額の治療費が両親を苦しめ、借金を少し抱えていたこと。

そして最近、父親の会社が傾き始めたこと……。

まだまだ調べれば、それなりの理由は出てくるかと」

「ありがとう。これを聞いてお主はなんとも思わぬか？」

アークは少し間を置いて、

「三賢人と呼ばれるあなた方が、忙しい時間を割いてまで、しがな
い一死神が回収した魂を勘定するなど……。ただの暇人に成り下が
ってしまい、私としても心が痛いです」

と鼻で笑った。

慣れとは恐ろしいものだ。

汚い野次には、もう聞き慣れてきた。

もう特に気にならない。

「貴様。何故、我々がわざわざ人間界まで赴いて、魂を回収するか、
知っておるだろう！」

「我々は世界の均衡を守る為に存在している。偏った回収は来世の
為にならない」

とげとげした言葉で、怒りを表わにする彼らは、自分が愚かだとい
うことに気付いていないのだろうか。

「それもだが……」

神様が口を挟んだ。

「我々はお主の身体を心配しておるのだ」

神様はいつだって優しい言葉を投げかける。
ただ表向きだけだが。

「お主は他の者とは明らかに違う。だからこそ、高い地位を与えられ、その地位を剥奪された今もも懂れ抱く若い者は少なくない。燃費の悪いその身体は、いつも魂を求めているはずだ。ヒトの魂は高エネルギー体。小さな魂や萎^{しぼ}んだ魂ばかり喰^くっておると、いずれお前の身に振りかかるだろう……」

『忘れるな。 今、

お前が立っていられるのは、
過去のおかげ、だということを』

周りからは拍手が聞こえる。
神様の重みのある言葉は、本当に彼らの心に届いたのか、
アークには疑問だった。

事実、衰えていく身体を目の当たりにして、初めて理解できるものではないか。

「なんか最近、妙に虚しい」

彼は左胸あたりのコートをぎゅっと握りしめ、少しうつ向いた。白い光に照される赤い髪の反射具合が変わる。

「それは明らかな熱量の不足だ」

三賢人の一人が溜め息を付きながら答える。

「お前が誰に何を吹き込まれたか知らないが、我々にとって魂はただの熱量ではない。

魂の価値は熱量。これは我らにとっての不変の真理。

よく心に止めておくがよい」

彼らは言うのだ。

魂の価値は熱量だと。

だから生物によって価値は違うのだと。

だから重さが違って当たり前だと。

「特に今は規制を強いてはおらん。好きなだけ狩るがいい。

特に人間は我々の手には負えなくなってきたのが事実だ。生まれる数が爆発的に増え、その上、科学が“生”を凌駕し始めておる。

我々はこの星を破壊するのは、人間自身だと踏んでい、……」

アークは静かに目を閉じ、小さな溜め息をついた。

「俺はあんたらみたいに、この星が滅びるまで長生きしようなんて思ってない」

彼は老人の推測を叩き切った。

闇の奥では苦虫を噛みつぶしたような声が静かに漏れる。

「フウ……。またくだらぬ世迷い事を」

神様が小さな声で呟いた。

「アーク」オブヴェイン。空っぽの方舟か。まだ50年前の女の事が忘れられぬか、ハーデイス」

忘れてない、と言ったら嘘となる。
だが、忘れなければならぬ。

「魔女に名付けられた名を捨てられぬ所をみると、魔女の呪いは解けてはおらぬようだ。

言っておくが、明らかにお主は変わった。死神として有らぬ方向へな」

「魔女なんているはずもない」

アークは低い声で否定する。

「それに、俺は引きずってもいない」

魔女なんていたら、こんな思いするはずもないのに。

彼の左手は、コートのポケット中で自然と固く結ばれていった。

「その力の籠った否定が何よりの証拠じゃ。まだまだお主も若い」

神様は高らかに笑う。闇の中が笑い声に包まれた。

長いものには巻かれておけ、何処の世界も同じなのだ。

アークの中で煮え繰り返るような感情が沸々と湧いてきた。

だから、嫌いなのだ。

「ところで、貴様はオルクスの奴を知らんか？ 管轄を外れ、赤紙招集も無視しやがった」

オルクス。

懐かしい名前だ。

突然、懐かしい名前を聞いたせいか、過去の事が次々と頭に甦る。が、アークにとって、あまり心地よいものではない。

「知らない。しかし、過去にも何度かあっただろう。特に珍しいことでもない」

アークは冷たく言い切った。
しかし、

「なら俺をそっちの管轄に移して欲しい。少し……この街の人間に感付かれた」

今日、ヨウラクに感付かれた事が頭から抜けていない。

アークの経験上、あの目は危険だ。
何か策を練られているに違いない。

「それは無い」

神様が言う。

アークを疑問を呈する前に、三賢人の一人が静かに付け加えた。

「この星から消えたのだ」

アークの思考が、少しだけ止まった。

「特に珍しいことでもないじゃろ」

闇は淡々と答える。

そう、特に珍しいことでもない。

街が破壊され、人が死に、悲惨な事件だったとしても、記憶から消えることは歴史上よくあること、だ。

人間は自分達に都合がいいように歴史をねじ曲げ、伝えてゆく。

裏からいいように糸を引かれていようとも。

「なら、俺はどうしたらいい……？」

「む……。貴様がこちらの意見を求めるとは、丸くなったか、相当切羽詰まっているかのどちらかな……」

切羽詰まっている。

図星だ。

「異動は一年と半年のち。なに、手を一度叩いているうちに終わる年月だ」

「人間が集まる所に顔を出さなければ足はつかぬ。お主なら上手くやれるはずじゃ。今までもやってきただろう」

彼ら三賢人は違う世界で、しかも安隠と腰を降ろしているだけで、世界を廻している。

彼らの意識の中には、現世での経験など風化してしまったらしい。

「ちょっと待て！ 現状維持ってことか？ そんなもの解決策でもなんでもな、……」

「今回はこれにて閉会する。オルクスが発見されしだい連絡するよ
うに」

神様がアークに異論を認めぬ、と言わんばかりに言葉を遮り、閉会

を宣言したのだ。

闇の向こうは椅子を引く音だろうか、大勢が立ち上がる音が聞こえる。

「おい！ 聞けよ！！ ジジイ共、貴様らの“生”は誰が稼い、…」

アークの叫びは虚しく、後方の闇から、突然、筋肉質な腕がアークの両脇を捉えた。

小麦色の筋肉質な腕。

あまりにも強い力。

背があまり高くない彼は強制的にライトの下から連れ出され、気付けば例の廃ビルの一室に呆然と立っていた。

カビ臭く、埃っぽい荒れた部屋には青白い光などあった痕跡すらなく、ただただ汚い。

「畜生」

彼は唸るような低い声で呟き、頭抱えた。閉じた目の目頭を押さえる。

頭の中に次から次へと溢れてくる憎悪。それを抑え込むプライドと理性。

アークは辺りに乱雑に転がっている朽ちてしまった机を思いっきり蹴飛ばす。

しかし、埃が虚しく舞い上がるだけで、乾いた木の音は、瞬く間に闇夜に溶けていった。

心 《ココロ》 唄

きみは人間で

ぼくは人間じゃなく

あなたは人間で

ぼくは人間じゃない

あには人間で

ぼくは人間ではなく

ちちは人間で

ぼくは人間ではない

ぼくは人間ではない

だれかが言っていた

前の100年間は
『戦争と暴力の世紀だ』
って

だから人びとは
もう

うんざりしているんだって

たたかうことを
人をころすことを

だけど

それから何十年、何百年あとにつまれたはずのぼくは

戦争をしっている

戦争がぼくを生み

戦争がぼくをうばった

戦争がぼくをひつようとし

戦争がぼくをすてた

だから

人間になれないぼくは

戦争をきらった

そして

人間になれないぼくは

人間をきらった

この思い

わかってくれますか
かみさま

この

数字の羅列でしかない
悲しみを

この

冷たい身体しか持っていない
絶望を

わかってくれますか

ぼくはなぜ

生きているのですか

なぜ

こんなにも

悲しくなるのですか

なぜ

きゆうに

むねがいたくなるのですか

ぼくは

きんぞくのかたまり

ではないのですか

ぼくは

だれをしんじて

いきたら

よいのですか

狩 〈ハンター〉

「……イ。……なよ！」

遠い世界で声がする。

その時、気付いた。

ああ、夢を見ていたのかと。

「オイ！ 目を覚ませ！ 寝てんな」

少年が目を開けると、40間近の男が腰を降ろして、タバコを噴かせていた。

星のない黒い空へと煙を吐き出す。

煙は冷たい夜風にさらわれ、あっという間に闇夜に消えてしまった。

しかし彼は、40間近ではなく、実を言うと30代、しかも前半であることを少年は思い出した。

男はタバコを右手に持ち、少年を眺める。

「次起きなかったら、灰皿にしてやろうかと思った」

男は顎にある不精髭を撫でながら、ニヤリと笑った。
タバコのヤニで黄色くなった歯が微かに覗く。

くすんだ趣味の悪い、腐ったワインのような赤紫色のトレンチコートを身にまとう彼には、妻も子もいる。

「……アレさん、僕は別に構いませんよ？ 貴方の役に立たてるのなら」

少年は膝を抱えて座っていたが、身体を伸ばすかのように立ち上がった。

ここはビルの屋上。
地上18階。

秋の夜長に屋上での張り込みはとても寒い。

少年のキャップについているカンバッチがカタカタと鳴った。

「ふん。可愛くねえな。お前が言つと冗談が冗談でなくなっちまう」

男は低い声でぼやいた。

アレス・トラキア。

この細身の男は趣味は悪いが、腕は立つ。

この支部では古株だと聞いた。

「おい、あんま立つなよ。バレたらヨウラクまで怒られっから」

寝癖だらけの黒髪をなびかせながら、アレスは溜め息をつく。

「近頃よ、張り込みしたら『プライバシーの侵害だ』と、ありがたい抗議があつたらしい。全く自意識過剰な市民なこと。それで、逃がしたら『狩人が悪い！』ってマスコミと一緒に俺ら叩くんだけ。笑っちまう」

彼は灰色のコンクリートにタバコを押し付けた。

「まあ、俺らは報われねえってことだな」

彼はそう小さく呟くと、コートのポケットから小さな暗視対応の双眼鏡を取り出した。

そして、明るい街の薄暗い一角を見下ろす。

「……なあ、確か母親と息子だったよな」

「はい。43歳の中肉中背の母親と12歳の小柄な息子と聞いてます」

アレスは舌打ちし、素早く立ち上がった。

「裏口から逃げやがった。クティ通りを北上する、怪しい親子発見。現在、37番灯を通過」

彼は小さなピンマイクを取り出し、報告する。

「オイ、ジン！ 奴らが武器を持っているか、ちよいと見てくれ」

アレスは愛銃のスナイパーライフルに弾を装填しながら言った。
少年は銃について詳しいことは知らないが、ある漫画の主人公と同じ銃だと聞く。

少年はただジーっと薄暗い通りを眺め、何度かまばたきをし、呟いた。

「母親は護身用の小さな銃。息子は反応が小さいからサバイバルナイフぐらいだと思う」

「だそうだ。エディー、急ぎヨウラクに繋いでくれ。俺は奴の策に従う」

すると、アレスは少年に向かってピンマイクと片耳だけのイヤホン
を投げつけた。

これをつける、と意味らしいがアレスの粗野な扱いを見て、精密機械の管理は苦手らしい。
見るからにそうだが。

『みんな、指示通りに動いて欲しい……』

ノイズの波の向こうに、ヨウラクの声が聞こえてきた。

「ハハ……笑っちゃう」

アレスは急に腰を降ろし、タバコに火を付けた。

「机上の空論だ」

骨ばった頬に笑みがこぼれ、風に煽られた黒い前髪が顔にかかる。

「いや、ヨウラクさんの作戦は後々の利益が大きい。彼らの射殺は避けるべき」

少年は帽子を深く被る。

そして、少年は思案した。

まさか、裏口にわざと逃げ道を作っておいたのも――。

「アレさん。実際僕ら、ヨウラクさんの机上の空論を期待してここに来たでしょう？」

使えない部下の指揮なんて大嫌いなあなたが、こんな大規模なミッションに参加するはずがない。

僕らが動けば、空論なんて実現可能……」

組織の枠からはみ出しやすいアレスとジンをここに配置したのも――。

「まったく可愛くねえ、糞餓鬼だ」

アレスは不敵な笑みを浮かべ、歯と歯の隙間から煙を吐いた。

アレスはどんな状況においてもとても勘が良いことも――。

「……後ろから威嚇しりゃあいいんだろ？」

もしかして、全てあの人の策の内――？

アレスは愛銃のAR-15を杖のように使って立ち上がった。鈍い黒色を放つそれは、全てを奪い去る悪魔だった。

「オオカミは音もなく、血の雨を降らせるのが好きなんだがな」

アレス・トラキア。

狙撃成功率99.6%。

人は彼を『狂乱のオオカミ』と呼ぶ。

今日は何かの記念日らしい。

仮装した子供達が、飾り付けられた大通りを走り回っている。

オレンジ色の気味の悪いカボチャの明るい電灯に照らされながら、大人達も買い物に繰り出し、彩り豊かな買い物袋を抱えてた人達で溢れ返っていた。

それと対照的に、クティ通りというのは、全く人気のない薄暗い通りである。

一本違う通りを入ると、この街の姿は変わってしまう。
こちらの方が、この街の正しい姿と言うべきかもしれないが。

ジンは薄暗いクティ通りを駆け抜ける親子を見つけた。

ビルとビルの上を身軽に飛び回る彼にとって見つけることは容易い。

しかし、気をつけるべき事が一つあった。

それは、彼ら親子は狩人という『サカナ』を『釣る為の餌』だということである。

普通、気付かれず逃げる為には、人に紛れて逃げるのが当たり前とされており、最も有効とされている。

しかし、彼らそうではなく、むしろ目立つようにして逃げている。

そして、そう簡単に死神の逃亡情報が狩人側に流れってくるはずがない。

つまり、クティ通りのいたるところに多数の死神が待ち構え、何も知らない狩人が通りかかるのを待っている、とヨウラクは踏んδει

た。

「アレさん。30番Kビル屋上と28番……」

勿論、ヨウラクの読みは的中した。それもかなりの数でありそうだ。避けなくてはならないのは、死神の射殺と仲間の死亡。

1番灯まで追い込めば、あとは川の河口。対岸からの攻撃は離れ過ぎていて無理だ。
そこで、捕まえればいい。

「24番灯の陰……。これは僕がやつとく。縄」

すると、ヒュルッと風を切る物音がしたと思うと、街灯の陰から男の驚いたような声をあげた。

「あと少し……」

石畳を駆け抜ける足音が二つ。
ビルの上の風を切る音が一つ。

違う。

なんだか違う。

少年は自分の身体に違和感を覚えていた。

お腹がムカムカする、というのが正しいのだろうか。

親子の姿が大きくなるにつれて、違和感は更に激しさを増す。

イライラ？

ムカムカ？

違う。

なんだか腹の底が、ざわざわと言っている。

「3番灯付近、2階の窓。多分、ラストだと思います」

そして、彼は一息置いて、

「これより捕獲に入ります」

と静かに呟いた。

――夜は黒く波打つ河口。
流れているのか、澱んでいるのか、今の時刻では理解しかねる。
ただ大海へと続いているのは確かだ。

荒い、荒い二つの吐息がその黒い河を目指していた。
ビル群を抜け、河まで着いたら仲間の船が待っている予定だ。

母親はパーカーのフードを外す。冷たい空気が耳を刺激し、心地よい。

この汚いフード付きのパーカーも、滲む汗も全て、最後の時を演出する材料だ。
必ず、逃げてみせる。

彼女は息子の右手を握った。息子の手は驚く程冷たい。

あと少し。

一番灯のビルを抜ければ、もう河だ。
彼女は全てを前向きにしか考えられなくなっていた。
後ろに近付く足音など聞こえない。

「冊」

すると突然、親子の目の前にぬめりとした、金属の冊が出現した。
上からなのか、下からなのか。
あまりにも唐突に空間に現れた為、彼らには状況が理解が出来なかった。

しかし、彼らと河口を遮ったのは事実だ。

黒い、黒い、鉄格子。

未来への進路を塞ぐ、闇。

「檻」

後ろで幼い声がしたと思い、振り向くと既に鈍色の冊があった。
その先には、彼女の息子と同じ背丈の少年が立っている。
ただ表情を変えず、こちらを睨みつけていた。

もう彼ら親子に逃げ場は無かった。

「珍しいな……。お前があんな向きになるなんてな」

アレスは半笑いで近づいてきた。

辺りには通りの周りを包囲していた狩人達が事後処理を行なっており、ガヤガヤと騒がしい。

彼ら親子も、仲間の死神も全て護送された。

ヨウラクも拡声器を片手に、忙しそうに走り回っている。

「しかし、あんまり無理すんなよ」

彼はそう言つと、ジンの右手を手にとつた。

穴。

彼の右掌には円形の穴がくつきりと空いていた。

深紅の血液ではなく、鈍い光を放つ銀色の液体が、肉や皮を綺麗に突き破いたような穴から滴り落ちている。

ジンはすぐに手を払い退け、ポケットの中に隠した。

「別に向きになんかなくてません。少し、苛々しただけです」

ジンはアレスに背を向け、歩き出した。

そう、別に向きになんかなくていい。

母親の隣にいた息子に、少し自分を重ねただけだ。

12歳の時の自分。

12歳の彼。

同じ目をしていた。

自分のせいではないのに、こんな不条理な運命を背負って、

誰を恨めば救われるのか、

もがき苦しみ、

疲れた果てた目をしていた。

だから、久しぶりに夢を見たのか。

無意識の中でオーバーラップしていたのだろう。

――神様。

ようやく判りました。必要としてくれる人の為に
力があるんですね。

この身体が壊れようと
腕が吹き飛ばようと
絶望にうちひしがれようと

命令は絶対。

その人の為なら
僕は死ぬる。

道は
それしかないのだから――。

危 〈キケン〉

「今日もいい天気」

エリカはビルとビルの間から、微かに覗く空を見上げながら呟いた。
薄く汚れた水色が彼女を見下ろしている。

この狭い路地を歩くと、彼女の歩みは自然と速くなった。
彼女のローファーもリズムを奏で出す。

この先の何もない広場が呼んでいるのか、それとも、その先のアパートが手招きしているのか。

脳裏に一瞬だけ、赤い髪の男がよぎったが、次の瞬間、そんな考えは投げ捨てた。

「最近、学校来ないんだよね……」

担任は気にも止めておらず、彼は空気みたいな存在だからか、クラ
スマートフォンでさえ知らない人も多

い。

「私にしたら興味の塊でしかないのだけど」

彼女は小さな溜め息をついた。
奇しくも兄と重なる。

最近、兄と上手くいつてない。

兄はなんでも見透かすから嫌いだ。

そして、過保護過ぎる。

無理矢理、彼女を家に縛りつけようとするのだ。

『危険だから』

『危ないから』

口を開いたらすぐこれ。

最近ではうんざりしてきて、口も聞いていなかった。

エリカは兄なりの愛情だと判っている。

しかし、まだまだ遊びたい年頃の彼女には我慢し難い注文だ。

エリカは広場を通り過ぎ、崩れそうなアパートの階段をリズム良く登る。

そして、303の部屋と確認し、ノックした。

「あれ？」

エリカはもう一度、扉を叩く。

しかし、扉は微動だにせず、部屋の中も動きは無いようだ。

試しに何度もノブを回してみたが、どうやら鍵がかかっているらしい。外出中のようなのだ。

「あ」

金属が一気に割れる音。

彼女の手には、扉から離れたノブが握られていた。

エリカは無惨に取れたノブを見ても、しばらくは状況が把握できなかった。

彼の部屋の扉は勝手に開く。

「ま、まず謝らないとね……」

自分を無理矢理落ち着かせ、外で待っていたが、扉も開いてしまっている中で中に入る事にした。

香るミント。

相変わらずの部屋だ。

この前と変わってない。

大きな窓。

そして、広い空。

開いたままだと恥ずかしいので、少しドアを閉め寄せておいた。

ラスも居ないので、とても静か。

部屋に一人だけだと、どうしても最悪な結果を考えてしまう。
エリカは彼の怒った眼を知っていたから、思考が自然にそっちへと向かってしまう。

あんな眼を二度と見たくない。

怖い。

恐ろしい。

彼女は窓を開け、空を眺めていた。

エリカは幼い頃から空が好きだ。いつも違う表情を見せる空は人のようだ。

よく一人で喋っていたことを思い出した。

風が通り抜け、キッチンカウンターの上に置いてあった紙がひらひらと落ちる。

エリカは拾おうと立ち上がった。

「なんだ、仲良かったんだ」

どうやらヨウラクがアークに宛てた手紙のようで、任務の日時、集場所などが記されている。

エリカは、彼と兄が互いに嫌悪しているように見え、無理矢理会わせた自分を少し後悔していた

。

だがこれを見て、ノブを壊してしまった事や今までの杞憂など吹き飛んでしまった。

彼女もこの切り替えの早い性格を自覚しているが、周りに言われるぐらい酷いものではないと思っ

ている。

すると、カンカンと階段を登る音が聞こえ、彼女は現実の世界へと引き戻された。

「さて、なんて言って、からかおうか……」

彼女は足音に疑うこともせず、ドアの前に近づいた。

「ここはどちらさんお宅ですか？」

エリカが扉を開けると、見たことのない、薄い青色の髪青年が立っていた。

腰まである髪は軽く後ろでまとめてあり、黒いローブを羽織ってい

る。

この服装は聖職者だ。

エリカは宗教については詳しくはないが、この世界の常識として知っていた。

胸の辺りに白い十字の刺繍がある。

「ここは貴女の家ではないんですよね？」

彼が優しくそうな笑みを浮かべる。聖職者の慈悲に溢れる笑顔だ。

「ええ、違いますけど……」

「では、失礼しますよっと」

と言うと、彼は無理矢理アークの部屋に上がり込んだ。

「ちょ、ちょっと！ 貴方は誰ですか？ 突然押し掛けてきて、上がり込むなんて、神経疑う……」

「それはお互い様でシヨ？ うん。名前なんか忘れちゃったし」

彼はヨウラクからの手紙を手に取り、微笑みながら読んでいた。

「ウハ！ ハーデイスの奴は真面目だなア。狩人の仕事なんてやって、どーすんのサ！」

「え？ 名前を忘れる……？ ハーデイス……？ ちょっと、さっぱり分らないんだけど。貴方はア

イツと、どういう関係なの？」

「アイツ？」

急に彼の笑い声が止み、部屋は一瞬の内に凍り付いた。

今まで貼り付いていた、慈悲深い聖職者の仮面は剥がれ落ち、凄惨な眼をした一人の青年がエリカを睨み付けている。

「……なあ、お前みたいな下等な生物が、彼を『アイツ』なんて呼んでいいハズがないだろ」

一歩。

彼が近づく。

駄目。

危ない。

「ないに決まってるだろ！」

青年の腕は一瞬にして、エリカの喉元を掴み、扉に押し付ける。
エリカの身体は宙に浮き、身動きが出来ない。

「く、苦しい……」

呼吸も出来ない！

声も出ない。

「だ……れ……か……」

絞りだしてみても声にならない。助けを呼びたい。

なのに、声にならない。

彼女は心の中で後悔を繰り返す。

なんでこんな奴を入れたの、

なんでこの部屋にいたの、

なんでここに來たの、と。

彼女の視界がだんだんと狭まってゆく。

意識さえも遠退いてゆく。

抵抗しようにも力が入らない。

遠退く意識の中、彼の瞳がこちらを見つめていた。

青い瞳。

怖いくらい、

透き通っていて。

まるで氷のように、

冷たい色。

彼女の意識はそこで途絶えた。

「なんと、脆い……」

彼はエリカが気を失ったのを確認すると、手の力を抜いた。

彼女は重力に逆らうことなく、崩れ落ちる。

それはまるで壊れた人形のように。

「下等な人間が彼を迷わせる。そして、彼を弱める。その根源を排除するのが……」

彼はニヤリと笑い、エリカを見下ろす。

「得策」

彼はエリカを覗き込み、左手を振り上げた。

魂を戴こうか、

と優しく語りかけ、彼女の栗色の髪をかき分ける。

しかし、彼は振り上げた左手を下ろすことは無かった。

切れ長の眼を更に細め、青い瞳が彼女を捉える。

そして、彼の口元は緩み、笑みがこぼれた。

「フハハ！ この娘はヨウラクの妹か！ 狩人とハーデイス。これは面白いことになりそうだ……。」

それに……」

彼は立ち上がり、黒いローブをひるがえす。

「崩壊はすでに始まっている。私がわざわざ手を下すまでもない」

彼は風のように部屋を立ち去った。ドアが風に煽られ、力なく揺れ動く――。

「……なんだか耳が痛い」

汚いビルの屋上で寝ていた赤い髪の男が立ち上がった。

「気分悪いな……」

彼はそう呟いて街を見下ろしていた。

戦　《センユウ》

「……暖かい」

エリカは微かに目を開けた。

シミがいくつかある薄汚れた天井。
香るミント。

（あれ、私あの後どうなったんだろ……）

どうやら彼女はベッドの布団の中に居るらしい。

「派手にドアを壊してくれたな……」

聞き覚えのある声がしたので、彼女は瞬時に上半身を起こした。

「違っ……」

「わかってるよ」

この部屋の主は意外と優しく流してくれた。カウンターの向こうのキッチンで赤い髪が揺れている

。

「で、大丈夫なのか？ 胸」
「え」

エリカは一瞬、彼の発した言葉の意味が分からなかった。
胸？

この小さな胸の心配。

「へ……？ なんで胸？」

アークも何故伝わらないか不思議そうな顔をしている。

「左胸に決まってるんだろ？ 心臓だよ、心臓」

ヤカンから白い蒸気が上がり、彼はカップにお湯を注ぎ込む。
そして、湯気の上がるカップを持って近づいてきた。

「痛みがあつたら今すぐ病院へ」

彼は紅茶を彼女に差し出した。

「……ありがとう」

彼女は温かな紅茶をすする。
しかし、彼女は疑問を持った。

なんで私の心臓の事を知っているんだろうと。

「……あつたかい」

エリカは微かに目を開けた。
シミがいくつもある薄汚れた天井。
香るミント。

「で、なんで、心臓……」

「奴の髪の色は青かったか？」

アークは彼女の言葉を遮るように、静かに尋ねた。

彼女も重ねて聞くことが出来ず、小さくうなずく。

「う、うん……。眼も青かった」

「……」

彼は考える様に視線を落とす。何を考えているかなんて、エリカに

理解出来るはずもなく、重い空気が回りを包み込んだ。

耐えきれずエリカが口を開く。

「いつここに帰ってきたの？」

「……忘れた」

「あの人は誰なの？」

彼は答え無かった。

しかし、エリカは質問を続ける。

「大体の誰か分かってるんでしょ？」

「ああ」

エリカには彼が少しだけ、寂しそうに返事をした様に見えた。彼はあまりこのような感情を出すことは無い。

ますます気になる。

しかし、彼が言葉を被せる。

「それだけ喋れたら、もう一人で帰れるよな？」

彼は言葉を続けた。

「こんな用心の悪い部屋にいるよりはマシだろう」

エリカの脳裏に、あの青い髪のが、あの時の状況が、次々とフラッシュバックしてゆく。

とめどなく溢れるようにして蘇る記憶。

意識のない時間。

エリカはその時気付いた。

「……元高跳びの選手の体力をなめないで欲しいな」

エリカは小さく笑う。

「誰か判ってるんだったら行けば良かったのに。こんな鍵のかからない部屋に私一人置いて行くこ

とに、気が引けたんでしょ？ 優しいなあ、全く」

彼女はゆっくりとベッドから立ち上がり、すたすたとドアへと向かう。

「私は帰るね。明日学校で待ってるから」

彼女は壊れたドアに手を掛けた。

「……今日は迷惑を掛けて、ごめんなさい。それでも傍に居てくれて、ありがとう」

パタン。

力無く閉まるドア。

それは彼女の胸の空虚感に似ているような気がした。

それは彼も同じかもしれない。

「優しい、か……」

アークは誰もいない部屋を見渡す。

彼女は自分を優しいと言ってくれた。

しかしそれは、仮面を被った自分ではない。

本当の自分は死神という得体の知れないもので、人の魂を奪うことになんの躊躇もない化け物だ。

彼女は世界の為に人を殺すのは可笑しい、と語気を強めて言った。

彼女の言う通りならば、自分という存在は要らないし、必要でもない。

しかし世界は確実に人口が増えている。

人が死ななければ確実にこの星は崩壊する。

それを減らす為には、本当の自分は無くてはならない存在だ。

ただそうやって、殺戮の大義名分を掲げる度に反吐が出そうになる。

自分は少しずつ

死神としての力を失い、

人間に近づいてきたのかもしれない。

彼は小さく笑った。

本当のことなど彼女には言えるはずがない。
いや、言わないうちに消えてしまえばいい。

「まだ死神なんだよなあ」

自分に言い聞かせるように呟き、彼は部屋を出た。
奴に会いに行こうと思った。

日が暮れる。

と同じに、煌めき出すネオン。
アークは歓楽街を歩いていた。

艶やかな女性達が手招きをし、道行く男性に声をかける。
狭く汚い通りには何十というお店がひしめきあい、酒の匂いが漂っていた。

そこには夜にしか見ることの出来ない街がある。
それは大人の色街というのだろうか。

アークは彼らに見向きもせず、細い通りを歩いていく。

すると、一軒の古ぼけた店から女性を連れた青い髪の男が出てきた。

透き通った綺麗な川のような髪。

懐かしいな。

奴だ。

変わってない。

「っと、用事だ」

彼は女性の肩にかけていた腕を下ろした。

「ええー。もう一軒行く約束でしょ」

胸元の露出度の高い女性がまわりつき、毛皮のコートを振り乱す。

彼は無言で鍵を渡した。

女性も満足したように、妖艶な顔を緩ませ、夜の歓楽街へと姿を消えて行った。

ヒールの音が楽しそうに響く。

「神父様が女をたぶらかしているのかよ」

アークは後ろから声をかける。

「残念ながら私は牧師だ、ハーデイス。それに人間の女は股を開くのが仕事だろう」

彼は冷ややかな笑みを浮かべながら振り返った。

やはり、変わってない。

この眼を見るとゾクリとする。

捨ててきた物、

自分の心の奥に封印してきた物が

今にも甦りそうぞ。

「少し話がある、オルクス」

「大体予想がつくケドね」

「その喋り方を止める」

オルクスはクスリと小さく笑った。アークはこの不自然な発音が嫌いだった。

まるで小馬鹿にされているようで。

「相変わらず細かいなあ。場所は変えるかい？」

「ああ、勿論だ」

石畳に靴音だけを残して、彼らは消えた。

そして、彼らはあるビルの上屋上に風のように現れた。

夜風がと共に、足音も無く、闇そのものように。

「で、話ってなんだよ？ さつさと……」

アークが一步近づくと同時に、低い鈍い音が闇夜に響いた。

オルクスの頬にアークの拳が飛んできたからだ。
オルクスの顔は右へと流れ、頬が赤く染まる。

「今回は、これで許す。次は無い」

アークは握っていた拳をほどき、コートのポケットの中へと戻した。
オルクスは赤くなる頬に静かに手を触れる。
そして、夜風になびく青い前髪をかきあげた。

「残念だよ、ハーデイス。君には失望した」

と言うとオルクスは音もなく消えた。
アークの眼でとらえることの出来ない速さで消えたのだ。

「……ホラ。見えない」

後ろを振り返るよりも早く、オルクスはアークの背中に指を押し当てた。人差し指だろうか。

「慢性的な眠気。視力の低下。身体の鈍化。最近、魂を美味しく見極められなくなってきたんじゃない？」

「い？」

オルクスは耳元で甘く囁く。

彼の言っていることは当たっている。

やはり、奴の眼は誤魔化せない。

『彼女を守れなかったのも自分の責任じゃない？』

彼は案にそう言っている。

アークはそんな気がした。

「私は君をどんな死神よりも尊敬してきた。

権力に媚びることの無い、あの血に飢えた野獣のような紅い眼に、どれだけ私の心が踊ったことか、どれだけ緊張感が走ったものか。

君は誰よりも魂を奪い、殺してきた。

そして、誰にも負けない強さを持っていた。

私と共に戦争を起こし、魂の数を競ったこともあっただろう。

君は負けたことがなかった。

楽しそうに戦場を駆ける様は、鳥肌がたったものだ。

私はそれだけ君に一目を置いていた。君を認めていた。
それなのに……」

彼の指に力が入る。

「なんだい。このザマは。

風の便りでは聞いていたが、あまりにも残念だよ。

これではまるでアルビノのウサギじゃないか」

オルクスは低い声で言葉を続ける。いつになく真剣な声色だった。

「ハーデイス、銃の引き金は銃を撃つ為に存在する。
銃は人を殺す為に存在する。

いいかい、君を高性能の銃だとしてよう。

だが、魔女の呪いや理性によって引き金を引けなくなった今、君は修理にも出さず、手入れもしないまま今に至る。きっとこれからも続くだろう。

そして、銃は弾を吐き出さない間に銃身は錆び付き、銃として機能しなくなる。

いざというときに困るのは君だ。

過去を美化し、現実から逃避する。

自分の無力さを呪うだろう。

力を持っても使わなければ、それは『無』に等しい」

「引き金の引けない銃は鉄屑と一緒に捨てて何か？」

「当たり前だ。弾の撃てない銃など持っても仕方がない。

力は使う為にある。それを理性なんて陳腐な物で抑えつけることが出来るはずがない」

オルクスは背中から頭へ、脊椎に沿って指をなぞってゆく。

そして、後頭部で指を止めた。

「それに、君は暴発寸前だ」

「自分でも気付いているんじゃない？ 夜になると気分が良くなったり、強い誰かと対峙すると力が

抑えきれなかったり」

オルクスはあえてアークの嫌いな口調に戻した。

愛でるように。

触発させるように。

アークの脳裏には、初めてあの少年に会った時の情景が思い浮かんでいた。

あの時は何故か凄く気持ち良かった。

しかし、あれは本性ではない、と頑なに否定し続けている自分がいる。

「分かってるンなら、いい加減解放しちやいなよ」

青い悪魔が語りかける。甘い言葉をふりかざし、柔らかな誘い文句で誘惑する。

「君は他の死神や下等動物とは全く違う。大きすぎる力を抑え込むには限界がある、分かっている

と思うけどね」

突然。

彼はバンツと言うと、一瞬のうちにアークの前に回り込んだ。

びつくりした？　と言わんばかりの不敵な笑みを浮かべている。

「……お前はこんなくだらないことを言いになぜわざわざこの街に来たのか」

「まあ、それもある。同じ年の親友であり、戦友のハーデイスちゃんを、下等な人間を餌に力を計

つてみたのと、もう一つ」

彼はポケットからタバコ取り出し、火を付ける。

「^{ジン}GENEのオリジナルが気になったからね」

「なんだ『GENE』って。聞いたことない」

「だろうと思った。気になる？」

オルクスの右手のタバコを吹かす。そして、汚いコンクリートの上に腰かけた。

少し長くなりそうだ。

「国家機密だからね。一から話してあげるよ」

今日は新月。

月も星もない街。
妙に静かな時が流れ、オルクスのタバコからゆらゆらと煙が空へと登っていく。
雲もゆったりと流れている。

世界は変わった。

否、変わってゆく。

だが、自分達は変わってはいない。
それが少しだけ、いとおしい――。

遺　《ジン》

「北の帝国キリルは何十年も前から新武器の開発、新兵器の製造に余念がない。

表向きは平和を謳^{うた}っているが、全て秘密裏に行われていた。そのうち何処かへ戦争を仕掛けるのは目に見えている」

まあ、戦争を起こしてくれた方が嬉しいな、とオルクスは笑いながら付け足した。

「^{サカガミ}逆上博士は知ってる？」

「ああ。東のロボット工学の権威だろ。なんか賞を貰ったとか」

「よく知ってるね、意外」

オルクスは微笑んだ。

「キリルは博士を半強制的に拉致をし、北に連れていった。そして、ロボット工学を利用した兵器を造らせていた。兵器といってもね、キリルの要望は

『人間のようない器』

つまり、敵陣営に送りこんでもバレない人間のようない風貌に、ロボットのようない感情を削ぎ落とした物を要求した。

フフ…… やっぱり、人間の考えることはえげつなくて面白いよな」

オルクスは楽しそうに話してはいるが、アークは悪寒を覚えた。

科学の進歩は恐ろしい。

自分の手を血に染めず、人を殺してしまう方法を作り出してしまうのだから。

人間の歴史は戦争の歴史だ。

だから、より沢山の人を殺せるように、より打撃を与えることが出来るように進化してきた。

そして、勝った方が知っていたかのような正義を語る。

「くだらない」

実に、くだらない。

アークは空を見上げて小さく呟いた。
空も海も空気も全て被害者だ。
人間の私利私欲の為に犠牲になった。

大好きだった紺碧の空はもう無い。

漆黒の闇夜がただ上空に広がっているだけだ。

「そう言うなって。それを言うなら、人間を殺さない君の責任だよ。
あーあ、もっともっと殺せばいいのに。
まあ、私はどんな方法で人間が死のうが構わないから、手を出さな
かったけどね」

彼は軽く言い切った。

オルクスの思考は狂ってはいない。むしろ死神としては正しい。

一度に沢山死んでくれた方が、魂の回収が楽なのだ。

死神にとって人間は熱量でしかない。

ただ、アークの考え方がズレてきただけの話。
彼はその考え方に拒否反応を示すようになってしまったのだ。

オルクスがそのことを心良く思っていないのも知っている。
そして、『魔女』と呼ばれる彼女を憎んでいるのを知っている。

アークはそつとオルクスに視線を移した。

彼の白い肌が、街の光によって美しく浮かび上がっている。

街の光は、この男が破壊してきた街の数を知っているのだろうか。
魂の数を知っているだろうか。

そう思うと自分も同じだったことを思い出してしまふ。

過去は消えない。
償えないことだ。

オルクスは煙を吐くと、再び話し始めた。

「サカガミ博士自身、

『ロボットは戦争の道具ではなく、人を助ける為にあるべきだ』
という主張の一点張りだね、なかなか研究が思っように進まなかった」

アークはサカガミ博士の論文をわざわざ読んだことがあった。
彼の主張に感銘したからだ。

写真には短い黒髪で眼鏡をかけ、優しそうな男性が写っていたことを思い出した。

しかし、もう10年以上前の話だが。

「で、痺れを切らしたキリルは彼の妻と生まれたばかりの双子の息子を人質に取った」

彼はタバコを投げると、箱から新しい一本を取り出す。

オルクスは火を付けてないタバコをアークに向けて、言った。

「遂には彼の妻を殺したんだけどね」

オルクスはそう言うと、つらつらと詳細を話し始めた。

妻の遺体は冷凍保存で研究所に送られたこと。

博士はぼろぼろと涙を流しながら生き返らせようとしたこと。

彼の持っているだけの技術を全て、彼女に投入したこと。

しかし、再び息を吹き返すことは無かったこと。
最後は人の貌かたちすらしていなかったこと。

「残念ながら彼は医者ではなく、一人の有能な科学者に過ぎなかった。冷たい道具を造ることは出来ても、温かな人に命を吹き込むことはできなかった」

オルクスはタバコに火を付ける。

少し感情的になりすぎたかな、と彼は笑った。

すると、彼は黒いコートの内ポケットからネームプレートらしき物をアークに放り投げた。

キリルの国印の入った、少しくたびれた証明書だ。

よくやるな。

どうやら研究員の一人として紛れ込んでいたらしい。

「キリル側としては『次は息子を殺すぞ』的な脅しが効くようになったが、博士自身が息子を研究素材に使いたいと言い出してね。」

まあ、良くも悪くも、彼の妻の死で、いくつものヒントが生まれたから。あとは実行に移すのみとなった」

「そして、息子を使った……と？」

「そ。大正解」

冷たい風が彼らの横を吹き抜けた。

この風は寒さの厳しい北のキリルから、大地を走ってやって来たのだろうか。

アークはこの冷たい風に、少しだけ思いを巡らした。

「でも、そう美味い話はいくつも続くモンじゃないショ?」

オルクスは妖しく笑う。

もし、10年以上も前に完成していた研究なら、実用されていてもおかしくはない。

しかし、アークの耳には入ってきていなかった。

キリル帝国も国境線は緊迫状態が続いているが、戦争らしい戦争も起こっていない。

「設計図さえあれば大量生産出来る段階でね、研究所が何者かによって爆破された。博士、息子、設計図全てが忽然と消えてしまった」

オルクスは人事のように話すが、多分彼の仕業だろう。

そうでなければ、こんなに楽しそうに話す訳がない。

「しかし、キリルの国家警察の手にかかればすぐ見つかるのでは？」

「そう、その慢心がキリルの誤算のひとつ」

オルクスは細い人差し指を左右に降りながら答えた。

誤算。

しかし、人生において誤算などひとつも無いのではないか、とアークは思った。

誤算も含めての人格が形成される要素のひとつ。

だがこんなこと、所詮、綺麗事にはかわりはない。

まるで弱い人間のような戯言だ。

弱い犬はよく吠える。

それは相手が自分にはない強さを持っているから。

相手という強い存在を認めることが出来ないからだ。

自分が次第に小さくなってゆく気がした。

次第に世界に飲みこまれていく、小さな自分を感じるしかなかった。

傀　《カラクリ》

「――連絡は以上」

意識の遠くで担任教師の声がする。まぶたはとても重く開ける気すら無くなってしまう。

久しぶりに早起きなんてしてしまったから。

『待つてるから』って言葉を愚直に受けてしまったから。

こんなにも、モヤにかかった頭で学校に来てしまった。

最近の自分は明らかにおかしい。

『慢性的な眠気は熱量の不足』

わかっている。

オルクスの緩む口元が焼き付いている。

だけど、それだけではない気がするんだ――。

アークはまどろむ灰色の頭の中で思案する。

この浮遊感が理論的な思考を妨げてならない。

彼は机に伏せた頭の寝返りをうった。

周りは喋り声に溢れている。

すると、教室の端で数人の女子生徒に囲まれている男子生徒が目についた。

身長は驚くほど小さい。しかし、二重の眼は大きく輝いていた。

黒く長い前髪は眼にかからないようにする為か、ピンでとめている。なんだか女性的な男子だ。

彼は少しはにかみながら、白い歯を見せている。

『君と同じクラスだったと思うが』

ヨウラクの言葉が自然と思い出された。

外見は見るからに違うが、雰囲気は忘れもしない。
この黒い無機質な感じ。

アークの目はいつの間にか、彼を追いかけていた。

昼下がり。

どうやら外で体育らしい。

アークはいつも大きな木の下で見学をしていた。
何が楽しくて人間に合わせなければならない。

くだらない。

すると、いつもの木陰に先客がいた。

小さな男子生徒が座っている。

一人、文庫本を読んでいた。

「なんか楽しそうだな」

「なにが」

ジンはいつもと同じ無表情で振り向いた。前に見た時よりは血色が良くなっているようだ。

彼は静かに本を閉じる。

「その無愛想な顔、無理矢理作ってるだろうな、と思った」

アークはジンの横に腰を落とす。

彼はジンの右手には包帯が巻かれていることに気が付いた。かなり

深い傷のようだ。

ジンは小さく溜め息をつく。

「違う。朝からずっと監視をしていたようだけど、任務を円滑に遂行する為に、社会的コミュニケーションを取るに越したことはない。しかし、それ以外において表情など必要がない。僕には必要意義が解らない」

彼は再び本を開いた。

「僕には感情など要らないんだ」

彼は自分にも言い聞かせるようにゆっくりと答える。彼の眼はとても冷たく、そして寂しく感じられた。

アークは冷たい風に舞う落ち葉を一枚拾い、茎を指で転がしながら語りかける。

「だけど、お前に感情を押し殺すなんて無理だと思っけどな。『E
U・GENE・000』殺戮アンドロイド」

ジンは素早く顔を上げた。

しかしまた視線を落とし、遠くを見つめる。

「何の話が全く解らないけど。真夜中楽しそうな顔して徘徊するフリーの狩人さん」

そして、彼は自分には関係ないと言わんばかりに本を読み進める。冬には似付かないほどの暖かな日差しの中、生徒達はトラックを何周も走っていた。

「逆神 悠仁博士の遺作、E・U・G・E・N・E - 000。人間を土台に昇華された『人類最高の科学技術の結晶』と名高いとアンドロイド。しかしそれは、とある理

由により実用不可となり廃棄処分された……ハズだった」

「とある理由、ね」

ジンは静かに呟く。少し口が笑っていたかもしれない。アークは慎重に言葉を選びながら続けていく。

「そう。人間に、人間として育てられた殺戮兵器は、感情を持ってしまった。それは、制御の効かない危険過ぎる存在だったから」

アークは木の葉から手を離し、風に流されていった。カラカラと遠くへ飛んでゆく。

遠く、遠くへ。

「しかし、キリルは処分しきれなかった。それは何故か。設計図がない以上、残っているのは君しかいなかったから」

「よく調べたね」

彼のページを捲る手が止まった。

「組織の、それもごく一部の人しか知らないと思ってたけど」

彼は力の抜けたような笑いを浮かべる。幾分血色が良くなった顔も青白く、疲れているように見えた。

「……ファンタジー小説はいい。魔法があるから。自分の力でなんだって変えていけるのだから。自分の世界を救えるのだから」

アークは小さく頷いた。

「残念ながら趣味があうね」

彼はゆらりと立ち上がった。大きな眼の色が瞬きをする度が変わる。彼の眼はいつだって無機質だ。物理的な事実だけでなく、いつも冷たさを秘めている。

避けられない事実が、今にも彼を押し潰しそうに見えた。
事実はいつだって恐ろしいほど残酷だ。

17歳の少年が背負うにはあまりにも重過ぎる。

「だけど、僕は機密保持の為に君を殺さなければならない」

彼は力無く呟いた。

鋼の何かが彼の本音を包み隠す。

彼自身、どのように、何の為に存在しているのか、知っているから。
彼は在るべき正しい自分の姿で居ようとする。

死神を狩るだけの従順な猟犬。
獲物は機械的に抹殺するのみ。

アークの眼にそう写らせようとする彼の姿は、人間ではなく兵器だった。

「面白い」

アークは笑ってみせた。

「だが、今は昼間だ」

と、少し付け足した。太陽に指を差しながら。

「くだらない争いは出来るだけ避けたい。なんだか今日は気分が、」

「逃げるんだ」

ジンは意地悪く挑発する。

「そう言つて君は逃げてばかりだ。逃げてばかりだと何も終わらない。早く息の根を止めてしまわないと、再び敵は立ち向かってくる。僕みたいだね」

アークは理由のわからない居心地の悪さを感じた。

今を吹いている風が赤い髪をなびかせるが、何故だろう。

まるで、遠い日の間違いだらけだった自分を見てるようで、アークは冷静な判断を失いそうだった。

「俺は殺すことが勝利だと思わないし、逃げるのが敗北なんて思わない」

アークは低い声で呟いた。自分の気持ちが自然と滲み出る。

前まではこんなに熱くならなかったはずなのにな、と心の隅で冷ややかに思いながら。

ジンは、素早く目を反らした。

「人を殺したってなんの解決にもならない。家族、仲間が憎しみを抱き、再び立ち向かってくることをお前が一番知っているんじゃないのか？」

ジンは何度も繰り返し、小さく呟く。『そんなの判らない、判らない』と。

「……僕には判らない。僕達、狩人は悪を排除することが務め。何故、悪を殺してはならない？」

そして、アークの顔を指差す。

「そして、君も判らない。そう思っているながら、何故、……狩人として戦いの中に身を置く？」

ジンは少し考えて『狩人』という言葉を発した。

彼はもう気付いている、いや、知っているのかもしれない。アークが人間ではないことを。

「さあ」

アークは砂を払いながら立ち上がり、そばに置いてあった鞆を手取る。

「まだ質問に答えてない」

「まさにお前の思ってる通り……かもな」

アークは語尾をわざと曖昧し、彼の顔を見た。

ジンは表情すら変えなかったが、内心ふて腐れているに違いない。

ジンは少し口を尖らせて、

「言つとくけど、W・E・A・Dには手加減という言葉はないから」と不満そうに付け足した。

どうも『W・E・A・D』と聞くと、エリカの兄が自然と思ひ浮かび、あまりいい気持ちにはなれない。

条件反射であるが、死神であるということがあまりにも大きいようだ。

「ああ、よく知ってる。じゃあ、あとマツザキによろしく」

アークはジンの元を離れ、学校を出た。後ろで彼の声がしたが、わざと聞こえないフリをし、振り切る。

元々来るつもりなんかなかったし、これ以上自分についても知られるのが嫌だった。

もう必要ないかもしれないが。

『何故、君は戦いの中に身を置くのか？』

アークはジンの言葉を空に向かって思い返す。

答えは至極簡単だ。

死神だからだ。

自分が手を染めるだけで、全てが終わるのなら、

自分が手を下すだけで、笑って暮らせる世界になるのなら――。

彼は首を横に振って、思考を止める。

「詐欺師で偽善者の戯言に過ぎないな」

彼は石畳に向かって、ため息を一つしてから呟いた。

ジンはと言うと、木陰からアークの背中をただ見送っていただけだ。

赤い髪。

憎いぐらい赤い。

ジンはアークが視界から見えなくなると、腰が抜けたように座り込み、顔を伏せた。

風が彼の髪を優しく撫でる。

「ヨウラクさん……僕は、僕は、本当に役に立つ存在なのでしょう
か？ こんな身体が震えている僕を、あなたは本当に必要として
いるのでしょうか

？」

今にも消えてしまいそうな声で、自分自身に語りかける。

「ヨウラクさん、僕にはわかりません」

ジンは自分自身を肯定するのが苦手だった。

自分で存在意義を問うだけで、今にも崩れそうになる。

どんなに考えても、自分は人間ではない、と代わり映えのない答え
に行き着いてしまうから。

どんなに強がってみても、偽りの自分ばかりが大きくなってしまっ
から。

だから、他人に聞いてみたくなる。

『お前はどんなんだ』と。

「感情を押し殺していないと、人を傷付けてしまそうで、怖いだけ
なんです」

命令は彼に存在意義を与えてくれる、唯一の存在だ。

命令にすぎれば、感情を出す必要がない。

そう思う度に、胸に風穴が空いたような虚しさに襲われた。

そして、エリカの笑顔を見る度に人間に懂れていった。

「どうして僕は人間ではないのですか？」

空に虚しく語りかけるが、当然の如く返事はない。
ただ彼の傷口から、鉛色の体液が包帯に染み出しているだけだった。

タ ヘユウゲレ

日が傾き、空がオレンジ色に染まる頃、終業のチャイムが鳴る。

ジンはいつもの下駄箱の辺りでエリカを待っていた。

白いプラスチックの下駄箱が並び、からっぽの傘立てが横に連なる。

エリカと帰る場所がW・E・A・D39支部と同じことが多いので、よくここで待ち合わせをしていた。

木々の伸びる影に身を重ね、暮れゆく太陽から避けるように立つ。
慣れたものだ。

ふと、ジンが目線をあげると、趣味の悪いコートを着た男が、彼の目の前に立っていた。
うつそうとした黒髪を掻いている。

「なあ、太もも美人の教員いねーか？」

「……久しぶりに会うのにそれですか？ ていうか、太もも美人ってなんですか？」

アレスはジンの両肩を瞬時に掴み、彼を揺さぶる。

「太ももが美しい女性のことに決まってるんだろ！」

太ももが美しい女性はケツも美しい！

わかるか？

太ももからケツにかけての曲線美、まるで聖母ように全てを包み込み、甘く、切なく……」

ジンは脱力感のあまり、彼の力に逆らうことはなかった。

ジンはこの男は妻も子もいることを思い出した。

ついでに、離婚調停中だということも思い出した。

「で、結局、何をしに来たんですか？」

アレスの熱弁を遮るかのように、ジンは彼の手を払い落とす。

「ミニスカから覗く、あの太ももの絶対領域……」

ああ、いや、これをな『わざわざ』『お前の為に』持ってきてやったんだよ！」

そう言つて、地面に落ちた茶色い筒を拾い上げた。
ほんの数秒前、アレスがジンの両肩を掴んでいなければ、彼の手に握られていたことだろう。

ジンはそう思うと、自然とため息が出た。

「……別にわざわざ持つてこなくても」

ジンは茶色い筒の包み紙を破き、筒の中身を取り出した。

それは黒い傘だった。

普通の小学生が使うような物だ。

「それがご所望の品の日傘でございます、大統領」

アレスは嫌がらせの為か、わざと滅多に使わない敬語でジンに話かけた。

彼の口から黄色い歯が覗く。

「じゃあ、俺はもう行くぞ」

「僕も行きましょうか？」

ジンは傘の開き具合を確認しながら、アレスに訪ねた。
アレスは黒い髪を掻きむしる。

「あー、俺はアレだ。ほら」

ジンは瞬時に彼の言いたいことを理解した。

彼との会話はだいたいこんな感じに進んでいく。彼は指示語が多い。
まだ会ってから数カ月しか経っていないのに、ジンは彼の言いたい
ことを理解できるようになってしまった。

なので、大変ですね、と声をかけておいた。

「ホント匂いがキツくて大変なんだよな」

「鼻が効きすぎるのも問題ですね。くれぐれも尻尾を出さないように」

「おいおい、誰に向かって言ってるんだよ。いや、ここは『上手い！』
と言っておくべきか」

アレスはニヤリと笑い、手を振りながら学校を立ち去った。

ジンは趣味の悪いコートが夕焼けの街に消えていくまで眺めていた。

ジンはアレスの欲の無さが好きだった。

人間は力を持つと、欲に溺れ、権力を欲するようになる。
そう思っていた。

しかし、アレスはヨウラクの元から離れようとしない。
年下から指図されるのは、心地良いものではないはずだ。

「……わからないな」

彼は傘を見ながら言った。

まだまだ世界にはわからないことばかりだ。

すると、遠くから廊下を走る足音が聞こえる。

ジンはそちらに身体を向けると、肩で息をしたエリカが走ってきて、

頭を下げていた。

「ジン君ゴメン！ ホント忘れてた！」

偽りもしない彼女の声が昇降口に響く。ジンは少し恥ずかしく思った。

彼女は狙っているのか、不器用なのか、天然なのか。いや、素なんだろうな、とジンはなんとなく思う。

「別に気にしてない。あれ、でも鞆は？」

ジンはエリカが手ぶらであることに気付いた。

「あのね私、今度ある『創立祭』の実行委員を頼まれちゃったから準備があるの。もう少し時間がかかりそうだから、先に帰ってて、って言いに来ただけなの」

「待っていいようか？」

「ううん」

彼女が大きく首を振る。

「任務あるでしょ？ 兄がきつと困ってるから早めに行っておいて」

エリカはニコニコしながら答えた。

彼女は自分の兄が『W・E・A・D』の幹部ということによって、自らの身に及ぶ危険は考えてないようだ。

しかし、エリカの言葉もジンにとっては命令だ。素直に従ってしまう自分にもどかしい。

彼女はジンを見て、再び嬉しそうに笑った。

「なんか最近、ジン君が喋ってくれるようになって嬉しいなあ」

エリカはジンの頭をくしゃくしゃにする。

「最初は話しかけてもブスーっと黙ったきりで、やっと喋ったと思ったら『うん……』ただだもん。兄には饒舌なのにさ！」

「別にそんなつも」

「ほら！でも今は貸してあげたピンでちゃんと前髪とめてるし、めざましい進歩だと思うよ！」

彼女は楽しそうな声をあげ、彼女は再びジンの髪を整え、前髪をと

める。

エリカの細い指がジンの黒い髪に優しく触れた。

彼女は優しい。

なのに。

こんな自分のそばにいる。

エリカはジンをよく判らない気分にさせた。

それは悲しいというべきなのか、

煩わしいというべきなのか、

ジンの頭の中に何十という単語が浮かぶが、

どれも正解ではないような気がした。

街を歩くと、なんだか虚しくて、悲しくなるような夕焼けにジンは感じた。

薄汚れたビル、踏み慣らされた石畳、散らばるゴミ、煙る排気ガス。

「おかあさん、みて！ カサ！」

反対側の道路を歩く幼い女の子が、無邪気に彼を指差す。

「あめ、ふつてないよ？」

彼女は母親に純粋な目で疑問を投げかける。

母親は彼女の気をそらす為に、手を強く引っ張っているように見えた。

ジンはそれに気付くと、サツと傘で顔を隠した。

彼には自分が醜い物のように思え、それが何故か恥ずかしい。

「感情など捨てたはず……なのにな」

彼は小さく問いかける。そして、確認する。
なのに、何故か熱いものが込み上げてくる。

誰もがエリカのように、自分を受け入れてくれるはずもなく。

「いや、彼女は真実を知らないだけ」

彼は自分の、傷だらけの手のひらを見た。

汚い世界で生きるとのこと――。

汚い世界で生き延びるとのこと――。

それだけで儚い人間の死と生が感じられると思っていた。

「揺らいでいる。誰かのお陰で」

伏せていた目を上げると、

薄汚いシャツに色褪せたズボンを履いた男が前方の狭い路地へと入って行った。

ずんぐりと太った、感じの悪そうな男だ。

急にジンの思考が、狩人の思考へと切り替わる。

そして、脳内に蓄積された『指名手配中 死神リスト』からヒットする物を瞬時に探し出した。

リストNO・3527564
バートンシエンナ

どうやら死神の中でも腕が立つ方のような。
しかし、所詮下位の手を汚すだけ者に過ぎない。

ジンは手に巻いていた包帯を解くと、シエンナを追いかけて路地へと入って行った。

268

ジンの頭には、何百通りのシエンナ確保のシナリオを描いていた。

幸い彼が日の当たらない薄暗い路地に入ってくれたので、動きやすい。
それに細い路地も全て頭の中に入っている。

ジンは静かに黒い傘をたたんだ。

いつも、道を歩いている時に限って死神を見つける。

その度に『携帯型通信機』を持つべきか迷っていた。

彼も精密機械の扱いが苦手だ。

いや、身体が受け付けない、と言った方が正しいかもしれない。

時刻はあと10分で日没だ。

ジンは空を見た。

そして大きく息を吐くと、静かにシェンナに近づく。

そして、声をかけた。

「……バートンシェンナ。

誘拐、殺人、放火の罪で指名手配中。

直ちに、右胸のナイフ2本と、ズボン左ポケットの拳銃を捨てろ」

ジンは傘の先をシェンナの背中に当てる。

鼻につく、酒臭い匂いが彼の身体中からしていた。

「おやおや、随分とカワイイ狩人だね」

彼はクククと、気味の悪い笑い声をあげた。

彼が動く度に大型のアクセサリーが音をたてる。

「噂にやあ、聞いてるよ。ちっちゃなのに、ハンパなくえげつねえ狩人がいる、ってな」

シエンナは素直にナイフを地面に落としていく。
石畳にナイフが跳ねる音が響いた。

「とおーくからでも武器が判るんだってな。全くきめえ話だ」

そして、最後に拳銃を落とした。

「手錠かけるからこっちを向け」

ジンが低い声で命令し、傘を下げる。

シェンナがこちらを向くと、舌を出して笑っていた。舌にも鼻にも耳にも、凄い数のピアスが光っている。

「悪いが狩人さん、俺の勝ちだ」

彼がそう言うと同時に、既に拳が飛んできていた。

ナックルダスター。

ジンがそう気付いた時には既に遅く、左目に焼けるような痛みが走った。

ジンは体制を崩し、膝まづく。

彼の左目は無惨にも潰されていた。
彼の左目は光を失った。

左目は視界を無くしてしまった。

ジンは僅かな金属にでも反応する眼を持っていた。

形、大きさ、純度など。

それらを見てどんな物かを判断していた。

しかしシェンナの場合、彼は沢山の金属アクセサリーを身につけている。

その為、ジンは指にはめられた武器を『何か大きな指輪』の類だと勘違いしてしまったのだ。

「不覚……」

ジンは左目を押さえながら、己の能力の過信していることに気付いた。

「へへへ……。武術なめんな」

温かい鉛色が流れ出す。

痛みで気を失いそうになった。

しかし、右目の視界がナイフと拳銃を拾い、笑いながら近付いてくる男をとらえている。

ジンはふらつきながらも、黒い傘を杖代わりに立とうとした。

しかしシェンナはそれを見ると、ナイフを右手に持ち速度をあげる。

と。

乾いた、硬い金属音が狭い路地に響いた。

鉛色の体液が石畳に垂れる。

「それ。ただの傘じゃねーな」

シェンナがナイフを押し当てながら言った。

ピラスを見せつけるように、舌を出して笑っている。

ジンは傘の柄の部分から、金属製の刃物を僅かに引き抜いていた。

「……特注だよ」

ジンは全てを引き抜き、ナイフを押し返す。
そして、立ち上がった。

「本当は使いたくなかったんだけどね」

「そんなキテレツな傘をかい？」

シエンナは左手に持ったナイフで再び向かってきた。

「違う」

ジンは低い声で呟いた。

硬い金属同士がぶつかり合う。

しかし次の瞬間。

シエンナは空いている右手のナイフを大きく振りかぶった。

そして、無防備となったジンの腹部へ迷うことなく。
一筋に。

突き刺した。

「……ねえ、リキュテウムって知ってる？」

ジンはいつもと変わらぬ声色で、腹部に刺さっているナイフを冷静に抜いた。

そして横に投げ捨て、石畳の上で虚しくナイフが回る。

ナイフについた鉛色と同じものが、湿っぽい路地に飛び散っていた。

「知るかよ！ てか、なんなんだ……その血の色は？」

シェンナはジンの明らかにおかしな血の色に動揺し始めた。

そして、続く斬撃が明らかに横に逸れる。

が、ジンはまだ治りかけの右の掌をナイフの前へかざし、斬撃を受け止めた。

ナイフの先は掌を貫通し、どろっとした鉛色の体液がゆっくりと垂れる。

「僕の唯一尊敬する科学者が、人生をかけて造り上げた金属……」

すると、先ほどまで石畳や汚いレンガに付着していた鉛色の血が丸く変形し、浮遊を始めた。

小さな雫は寄り集まり、塊を作る。

「僕の出す微力な電磁波によって、好きなように形を変えることができる」

ジンの切れた掌からつたう体液も『鉛玉』として浮き上がった。

「勿論、硬さもね」

と言い放った瞬間、シエンナの顔の両側を、鉛色の、しかも硬い、針のようなものが突き抜けた。

シエンナの髪が僅かに切れ、砂埃と共に風に舞う。

彼は驚きのあまり何度も瞬きをした。
その間にも、鉛色の金属は元の球の形をなしてジン頭上に浮かんでいる。

ふわふわと。

質感こそ異なるが、まるで風船のように。

あそこから伸びてきたのは言つまでもない。

「や、やべえって、あんた！ 痛覚とかそーゆーもんはねえのか」

「ない」

ジンは切り捨てるように即座に答える。

「人間じゃねえよ、そんなの。アンフェアだ！」

フェアもアンフェアも、不意打ちをした彼の方がよっぽどアンフェアではないのか、とジンは疑問に思ったがあえて口に出さなかった。

それが死神。

それが人間。

だから嫌なのだ。

「ま、待て！ 早まるな！ 俺を今、ここで、無惨に、串刺しにして、晒しても狩人側にはなあんのプラスにならないだろ、な、な？」

「いや、手駒が減ることには大きなプラス」

ジンは掌に刺さったままのナイフを見た。

そして、シエンナにゆっくり眼を移すと、小さなケダモノのように怯えている。

小さな男だ、ジンはそう思わずにはいらなかった。

そう思うと、赤い死神の例のヤツは特別なのかもしれない。

ジンは小さく息を吐いた。

「そして君を生かしても、プラスはない。それほどの情報を持っているようにも思えない」

シエンナはツバを飲み込むと、これは分が悪いと思ったのか、直ぐ様背を向け逃げ出した。

しかしジンも勿論、逃がす訳もない。

「壁」

ジンの声があったかと思うと、逃走者の前にシャッターが下りてくるかのように、鉛色の壁が現れた。

「ひ、人を殺してはいけないのだぞ！」

シエンナは鉛色の壁に背をつけながら、恐怖の為か意味不明なことを叫んだ。

「わかってる」

ジンが落ち着きを払いながら一歩近付いた。

「君は人ではない、ただの死神だ。死神は不幸を撒き散らす。死神は人々に治らない傷を付ける。死神は世界に悲しみを呼び込む」

ジンの中で、エリカが言っていたことが思い出された。

彼女はいつも笑っている。だが、その裏の苦勞をジンは知っていた。

『死神が私を、兄を変えたの』

彼女の目は潤みを帯びていた。

人の死は人生を変える。

いや、自分は人ではないか、とジンは訂正した。

ジンの家族は、彼と彼の紙切れの為に死んでいった。

自分と自分の設計図は、兄と父の命より本当に重かったのか？

自分はそこまで価値のある存在なのか？

この鈍色を吹き出す身体は、人間の未来など創り得るのだろうか？

死んだ人の分まで――、などという精神論は大嫌いだったが、

なんだか考えると胸が苦しくなる――。

と、その時。

突然、ジンの視界がぐにやりと歪んだ。

視界がどんどんと霞んでいき、彼のバランス感覚は失われ、立っていることが難しくなる。

ジンが揺らいだ、その瞬間。

シェンナは隠していた銃を取り出した。

そして、ジンをめがけて、歯を食いしばりながら、引金を引いた。

カンッ――！

と金属に当たったような音が響き、ジンは衝撃で後ろに倒れた。

シェンナの手に握られた銃からは煙が立ち上っている。

「……へへ」

彼は汗を流しながら、青ざめた顔で薄ら笑いを浮かべた。

「大人をなめんなよ、少年」

彼は足を震わせながら、動かなくなったジンを横目に通り過ぎてゆく。

「柵」

油断をして歩いていたシェンナの前に、今度は柵が現れた。彼は思わず振り向く。

そこには、発熱時のように顔を異様に真っ赤にしたジンは、呼吸を乱しながら呟いた。

「……逃がさ……ないよ」

「くっそ！」

シェンナが自慢の拳を柵に打ち込むが、鈍い音が反響するばかりだ。彼が辺りを見回したところ逃げ場は無く、錆だらけの、滅多に使われていないだろう非常階段しかなかった。

彼は目についた唯一の逃げ道、急いで駆け登っていった。

「……予想外だな」

路地に残されたジンは、カンカンと階段を登る音を聞きながら、僅かに見える空に語りかける。

このまま大人しく閉じ込められてくれるとは思わなかったが、まさか上を目指すとは意外だ。

ジンが埃を払い、立ち上がると銃弾が一つ転がった。

「しかも、満身創痍だ」

体液が足りない。

ジンの場合、血液も汗も何もかもがリキウムによって代用されていた。

その為、一度に沢山の量を外に出すと身体が動かなくなってしまう。

彼は手に刺さっていたナイフを抜いた、その瞬間。

ナイフは形を無くし、水のようになってしまった。
それを彼は空中に浮かべ、口へと運ぶ。

「日没まで動け」

ジンはそう言い残すと、黒い傘を握り、非常階段を登っていった。

自分が消えて無くなることは、至極当然のことだし、悲しむ者は無に等しい。

それならば。

もっと世界から必要とされている者の盾となろう。

もっと笑っていて欲しい者の笑顔を守ろう。

こんな身体を必要と言ってくれた彼の手足となろう。

所詮、機械は機械で、人間は人間。相容れない物だとしても。

この世界を受け入れよう。

横目に見える夕陽がとても温かい。

「……僕は人間になりたかった」

人間は理想だから。

「ハア？ 遂に脳ミソまでイッちまったのかよ」

シエンナは汚いビルの屋上で、なんとか隣のビルへと飛び移ろうと
していた。

ジンは黒い傘を開く。

日没まではあと少し。それまでなんとかもたせなければならぬ。

「止めといた方がいいよ……君の身体能力では100……いや、90%無理」

あとの10%は人間の可能性というものに賭けてみようか、とジンは心の中で笑ってみた。

『死』という物が迫ってきているのに実感が沸かない。むしろ、身体危険を知らせる警鐘が壊れているのではないか、という気さえた。

身体が熱く、重いのは変わらないのだが。

「……もうすぐ壊れる」

ジンは息を吐くように言った。

シェンナには聞こえないような声で。

「もう逃げ場はない。逃げたければ僕を殺せばいい。

……あとに生きてた方が勝ち、わかりやすい、でしょ？」

ジンは黒い傘をたたみ、横一文字に差し出すように構えた。

目眩がジンを襲う。

夕陽が波のように歪む。

目の前には『身体活動停止』という黄色い文字が踊る。

銃を構える音が僅かにした。

勝負は一瞬。

シエンナの銃弾が当たる前に、

ジンの意識が飛ぶ前に、

死神の心臓を突き刺して絶命させればいい。

「死ねよ、小僧!!」

シエンナが引金を引いた。

夕暮れは紅と橙が交ざり合い、黒いビルに溶けてゆく。

錆びた柵に反射する陽光は、綺麗に、綺麗に、煌めいていた。

跡へキズ

——「で、君は嫌味を言いに来たの？」

ジンは力の入らない身体を横たえていた。汚い屋上のコンクリートは太陽のお陰で温かい。

霞む眼を覗き込む赤に語りかける。

風に香る爽やかな香り。

白いマフラーにほのかに香ったあの香り。

「いや、啼き声が聞こえたから」

「泣いてなんかないよ」

そういう意味じゃないけどな、と赤い髪の彼はため息をついた。

「……僕、なんとなく、最期に君に会える気がしたんだ」

ジンは震えながら言葉を続けた。赤い髪の彼は、そうかい、となんとも無機質な答えを返した。

同情など期待してなかったから、想定範囲内だといえる。

「本当に駄目なんだな、日光」

会話の脈絡など考えずに、彼は突然言った。

そう、ジンは日光が全く駄目なのだ。日光に当たると動作不良を起こしてしまう。日光が駄目だから、肌が青白く、帽子も深く被っていた。

ジン自身、青白い肌がコンプレックスで出来るだけ隠したくて、前髪を伸ばしていたりしている。

「それに……もつと動揺してるのかと思った」

ただ彼も気を使うようで、慎重に言葉を選びながら答えた。彼らしいといえばそうかもしれない。

「……信じられなかった？」

ジンも動じず、言葉を続ける。

まあな、と少し赤い影が揺れた。

「僕は人を殺す為に開発された。だけど、僕は完全ではなかった、むしろ失敗だった。この身体は、人間には無い殺傷力を望み、手に入れた代償だ、って言われた。……要するに『副作用』だよな」

「キツイ副作用だな」

「まあね。でも、需要があつたから感謝してる」

ある物好きのお陰でジンはスクラップを免れた。

その物好きにキリルという国は初め、最新鋭の戦闘用機械を薦めた
が彼は断り、スクラップ待ちのGENEを格安で引き取った。

「人を殺せない。日光の下も歩けない。誰にも必要とされない……。
そんな僕をヨウラクさんは引き取ってくれた」

ジンは声だけでなく、身体も震えていた。

「どんな理由であろうと、単純に嬉しかった」

感情などない、と言っておきながら、こんなにも自分を曝け出すの
は恥ずかしかった。

しかし、心に空いた虚無感の穴から、何か溢れ出す。ずっとずっと
仕舞い込んできた何かが。

温かいのか、痛いのかよく分からなかった。

いっぱい無くしてきたから、とジンは軽く付け足した。

「誰も居なくなつて、初めて自分のことを知つた」

ジンは家族が死ぬまで知らなかった。日光が駄目なもの、血がくすんでいるのも全て全て病氣だと信じて疑わなかった。

父が言うから。兄が励ましてくれるから。家族が居たから。笑っていてくれたから。

「ある日突然、キリルの男に言われたんだ。『君はこんなところで燻くすぶっている必要はない。人を殺せ』と」

父は死んだ。

兄も死んだ。

いや、殺された。

全て要らないだろう、と。

君の居るべき場所は戦場だろう、と。

君の強さは正義だ、と。

冷淡に口を緩ませ、血しぶきの中、その人間は立っていた。

父と呼んでいた人間は血を流していた。

兄であつた人間は絶命していた。

「僕には出来る訳がなかった」

橙色から群青色に変わりゆく世界の片隅で、ジンは虚ろな目で空を見つめていた。過去を確かめるように、過去に正しさを求めるように。

「何も出来ないまま、僕は生きていた。焼かれて灰になるか、溶鉱炉でドロドロにされるか、時間の問題だった」

『——人を殺したら犯罪だよね？』

ジンが人間生活で身に付けた常識は、ただのしがらみでしかなかった。

『なのに、なのに、戦場でなら功績になるなんて絶対可笑しいよ。英雄とか、正義とかそんなの間違ってる。街の人と戦場の人の命の重さが違うなんてあるはずもない、あつていいはずもない——』

大人達は綺麗事だ、と笑って幼いジンを切り伏せた。
キリルの男はゆっくりと口を開く。

綺麗な砂の城を創るのに、手を汚さないと創れないだろう、と。
犠牲が無ければ、幸せもない。幸せを求めるから犠牲が生まれる。
それが人間。

「今まで正しいと思っていた全てが、通用しない世界で僕は泣き明

かした。絶望し尽くした」

「優しいんだな」

赤い髪の彼は優しく相づちを打った。

「死神の君ほどではないよ」

ジンは軽く笑った。少し強ばっていてぎこちない。

「僕はただ臆病なだけ」

ジンは本当に自分は臆病だと思っていた。

何も変わらない、何も変えようしない自分にうんざりしていた。

それは変えることが怖いから、変える為には何かを壊さなければならぬから。

人を殺すのだあれ。街を破壊するのであれ。

「……俺もだな」

彼は鼻で笑った。

「自分が凄く怖い」

赤い髪の彼は時折、とても哀しげな声を出す。何を考えているのか
分かり辛い彼の心情はとても繊細で、すぐに埋もれてしまう。

ジンは彼の心の深層に、ほんの少しの間だけでも触れた気がした。
しかし彼がどういう意図で発言したか、すぐ勘繰ってしまう彼は嫌
になるくらい臆病のようだ。

「意外」

「そうか？」

「うん。もっと強いと思ってた。君は人間の犯罪者集団“死神”と
は違う“ホントの死神”で、大鎌を振り回し、漆黒の翼で街を飛び
回って、きっと全部超越している——」

「ファンタジーだな」

彼はジンの言葉を遮るように冷たく答える。そして、考えるように
一息置いた。

「……だが、そう思われるのも悪くない」

やっぱり彼に憧れていた。
自分と似た臭いを感じたから。

その言葉と共に、彼の赤い髪、後ろ姿の黒いコートがじわじわと、夕闇に滲んでゆく。

眼が霞んでいるに違いない。

どんなにジンが瞬きをしようとも、眼を開けようとも、片目の世界は歪んでゆく。

——僕は泣いている？

そんなことあるはずがない、ジンは自分に言い聞かせる。

涙など忘れていた。感情なんて消したはずだった。

死ぬことは当たり前で、怖さを持つ感情は捨て去った、いや捨て去らなければならなかった。

誰かの為に死ぬことが本望で、時間稼ぎの盾として開発された、その訓練された。

——なのに、泣いている。

ジンは涙に、いや、リキュテウムに手を当てた。

——きつと……。

ジンの胸が何故か締まってゆく。それは痛いくらいに。

——なのに、まだわからないや。

自分に意志とか希望とか、そんな叶いもしない願いを持つ必要が無かった。

自分は機械だ、と言って逃げてきたから。
逃げていたら何も感じ無くて済んだから。

しかし今のジンはただ悔しかった。

こんなにも無知な自分が憎らしい、今の気持ちを言葉に表すことが出来ない自分が憎らしい、と。

——生きたい、のかなあ。

そう思っても、ジンの身体はもう限界だ。全てが遅すぎた。

日光自体苦手なのに、身体中のリキテウムが不足している。

『完全活動停止』までのカウントダウンが狭い視界の片隅に映し出されていた。

刻々と減り続ける数字。

時々乱れる視界。

気付くのがこんなにも遅くなかったら、彼にもっと早く出会っていたら、大切に生きることが出来たんだろう、と更に涙が流れる。

気付いていたのに。

だけど、ずっとずっと仕舞い込んでしまった。人間として生きていた記憶は恥だと教えられたから。

「……残念ながら力は誰かを救う為だけにある訳じゃない」

優しい声。懐かしい口元。

どうして忘れられてしまったのだろう。こんなにも大切なものを。ジンはフラッシュバックする言葉に自分の声を重ねた。

「だけど、優しい人が使えば優しくなれる。正しく使えば正しく在れる。どうか優しく在って下さい。優しい人で居て下さい」

父親が言っていた大切な言葉。そして、父親の科学者としての最後の願い。

やっと気付いたのに。

悔しい悔しい悔しい。

今までずっと父親に背を向けてきた。しかし、父親は偉大だった。

夜が近づく。それは終わりを意味する。数字が0に近づく度、身体

が動かなくなる。

これで、自分は消えて無くなる。

「『正しい正しさ』を見極めることが出来ないからみんな迷う。だから争いがなくならない」

彼の声も遠くなる。低い鼓動も弱くなる。

「……でもまあそんな歪んだ事実より、綺麗事を躊躇無く言える人の心は素晴らしく綺麗だ。そして、綺麗事を信じれる人はもっと綺麗だ」

彼は微かに笑っていたような気がした。

ジンも何故か笑えた。

そして、静かに眼を閉じる。

耳鳴りが全てを溶かしてゆく。過去も未来もそして今も。目の前には光のない暗闇が広がっていた。

00:00 『完全活動停止』

「——という夢を見た、的なオチで間違いないな、少年」

憂鬱。

少年の心情はまさにそれだ。

既に空は暗く、夜だろう。月の位置から考えるに彼は長い間、意識という真つ暗な空間を漂っていたことになる。

「それは『夢オチ』ってのは、全く読者に面白味を与えない——」

「違いますよ」

なんだ、このボサボサ髪の男は。何度言えば分かって貰えるのだ。先ほどもでは「なんだこのカオスな状況は……」。10文字以内に答えよ」など無理難題を押し付けておきながら、全く主旨が伝わっていない。

少年はひょいと立ち上がり、歩き出そうとする。

しかし目の前が歪み、彼の歩行を阻む。

ああ、頭が痛い。

しかし、彼は言わなければならない。煩わしい。

「……『完全活動停止』ということは今まで一度も無かったから、というのが正しい理由だけど、それだけじゃないんだ」

ほう、とヤニだらけの歯を見せながら趣味の悪いトレンチコートをなびかせて彼は不気味に笑う。

街の明かりが更にそれを引き立てているように少年は思った。

「実はココとココに爆弾が埋め込まれているから」

少年は頭を指で差し示してから、胸を拳で押さえる。

「リキュテウムが供給されなくなったら自動的に爆発する……はずだった」

科学技術の結晶であるからこそ、死体ですら敵国に有力な技術を与えてしまう。制作した側は技術の流出はなんとしてでも避けるべき問題である。

彼の場合、リキュテウムという血液の代替物質が身体に供給されなくなると、木端微塵に吹き飛ぶ、そうプログラミングされていたはずだった。

「それが爆発しなかっただけ。考えてみたら爆弾すら埋め込まれてないような気がする」

『父親によって取り除かれた』これが最も有力な仮説だ。しかし、仮説などと言って推測で話を進める気はさらさら無い。

「これぞ奇跡！　ってやつだな。まあ、どっちにしろ生き延びたんだ。次死ぬまで仲良くやろーぜ、少年」

全くあの才力ミの異名を持つ男は生死についてはかなり淡泊だ。誰もが涙を流す感動的な救出劇も、彼の場合は笑い話になってしまふ。しかもB級映画以下のクオリティーに。

しかし、それに救われる時もある。

気が楽になる、これに尽きる。

最低限の礼儀があるにしても、彼には気を使う必要がない。

得てしてこのような男は長生きしないと聞いた。ある日突然、風のようにこの世を去る、ような気がする。夢を求めて街を飛び出す青年のように。

「それでは、これから『奇跡の子』とでも呼ばせてもらいましょうか。

——何度殺されてもオレは立ち上がり続ける！　守るモノが有る限

り——『奇跡の子』近日公開……」

アレスはニヤニヤ笑いながら嫌味を言う。映画の宣伝のように、クサイキャッチフレーズを織り交ぜながら。

確かに人がこの状況を見たら、あの少年は不死身か、と思うかもしれない。

しかし形あるものはいつか崩れ、消える。それに例外はない。そして、それを一番実感しているのはジン本人だった。

小さな右手で潰れた眼を探る。生暖かい。冷たかったら良かったのに、いつも彼は思う。

「断固拒否です」

そしてジンは機械的に言葉を続ける。

「アレさん、僕はあなたの口から『任務がある』と確かに聞きました。それも逆方向だと僕は心得てました。

しかし僕が何も合図を送る術を持っていなかったにも関わらず、あなたは一番に駆けつけました。

つまり、あなたはサボリ——」

「ぜんっぜん変わってねえーな、いつぺん痛い目みたら大人の事情が分かるかと思ったのによ！」

サボりじゃねえ、これは有意義な休憩だ、と彼は叫んでいる。

確かに有意義な休憩だ。
なんてお気楽な身分だろうか。

「それでは、ヨウラクさんにも報告しておきますね」

厳重注意ぐらいに進言しといてあげよう。

「ちょ！ おま……減給だけは勘弁。タバコが吸えなくなる」

「……痛い目をみたらいい」

「おいおい。お前だって、高つけ傘をすぐ溶かしちまいやがるし、
昼間はブツ倒れる。お互い様だよな、な！」

「傘……」

ジンは忘れていたことを思い出したかのように力なく呟いた。

傘は人を殺す物質に変わり、人を殺した。

あれはジンを日光から守り、昼間でも死神に対応出来るように特別
に作って貰ったものだ。

「……お前が殺さなきゃ、殺されてた。お前が殺さなきゃ、誰かが
死んでた」

アレスがジンを様子に見かねて、普段は聞けないような真面目な言葉をかける。

「俺はすつげえ……なんてのかな、そーゆーのに鈍感だ」

彼は恥ずかしそうに髪を掻き分け、慎重に言葉を選んでいるように見えた。そして、タバコを口に含みながら話を続ける。

「別になりたくてこうなったわけじゃないぞ。ただ、そうになっていた」

いつもと違う真剣な声色。真剣な面持ち。やはり、彼も仮面をかぶっている。処世術という名の笑顔の面を。ジンにはそれが少し剥がれてゆくような気がした。

「……気付いたら神様とか死神様とか、生きるとか死ぬとか、そういう極限の世界にいて、雲を見るように腐乱死体とか肉片とか見てきた」

この街に流れつく前の話だけだな、と笑いながら付け足す。

「だから俺は死体の一山や二山、ましてや一つなんかで感慨深く、思いを馳せることは出来ない。

……だからと言ってお前を弱い奴だ、と蔑むことは絶対ないし、殺人者だ、といって白眼視することも絶対でない」

狩人には二つの種類があると聞いたことがある。

一つは世界を変えたい、死神が悪が蔓延^{はびこ}る世界を変えたい、という純粋な志を持って入る者。

もう一つは殺人に快楽を求める者。

狩人には、死神に対しての殺しが正当化されている。つまり死神に法律は適応されない。罪にも問われない。

ジンはアレスを言葉遣いの悪さから、後者かと思っていたがそうではないようだ。ただ、前者でもない気がした。
人間は奥深い、と常々思う。

狩人には軍人あがりの、血の気の多い男がごまんという。
戦争が終わって平和な毎日に退屈した彼らが、このような治安の悪い街に流れてくるのだ。

そして、39支部でも人を殺した数を自慢しあっている狩人の会話を聞いたことがある。ジンは軽く聞き流したが、アレスに言わせたら『クソ』らしい。

——数を数えられねえやつは、ただの馬鹿だが、数を覚えてるやつあ、汚ねえクソだ。よく覚えておけ、少年——

ただこの街の場合、ヨウラクというW・E・D・A幹部が常駐している為、不必要な殺人を犯した狩人にはこの街に居られなくなるほどの精神的攻撃を強いられると聞いた。

しかしあくまでも、W・E・D・A所属の狩人に限られる話で、フリーの狩人はまさに自由だ。誰も咎めることはない。

狩人のライセンスを持っている殆どの者は殺しの経験があると聞かないや、そうでなければ生き残れない。

「誰かが言ってたけどな。

“人は変わろうと思って変わるんじゃない、変わるべくして変わってゆく” なんだよ。

まさにその通りだと思ったね。おのずと身体が環境についていくんだ、悲しいことにな」

彼の経験から発せられる言葉には重みを感じられた。

彼のシワひとつひとつに苦悩として刻まれているのだろう。

「そのうち、なあんにも感じなくなるぞ、なあんにも……でも、今のその気持ち忘れるなよ。決して悪いことじゃないから」

アレスは小さく溜め息をついた。タバコの煙が空へと消えてゆく。彼の背中がいつになく大きく見えた。

「僕より機械みたいだね」

ジンはサラッと嫌味を言ってみる。すると、アレスは笑いながらタバコの火を消して振り向いた。その笑顔はいつもの顔だった。

「言うねえー。その言葉有り難く胸に刻ませてもらいましょうか、少年」

アレスはそういうと、肉塊に近づいていった。

ジンは初めて知った。

生命が物質になる瞬間を。

それは一瞬だった。

今、眼を閉じれば、その光景がリアルに蘇る。

あの時。

傘を溶かして、空に飛ばした。

彼はニヤリと笑い、引き金を引く。

その瞬間に、空から針の雨を降らせた。

血がしぶきのごとく舞い、彼の生命を、人生を奪った。

最後にシェンナが呟いた言葉も、表情も、視線の方向も、全て全て覚えていてる。

なにもかも初めてだったから。

消えることはない。

いや、忘れてはならない。

「叩いてあげなきゃ……」

「そつだな。検視するのが先だろうけどよ」

ジンはシェーナだった肉塊に手を合わせた。
何も感じない、ことはない。

こついうのを『胸が痛む』と言っのだと思う。

「……………ありがとうございました」

不思議と出た感謝の言葉。

多分、決意の言葉なんだとジンは思った。

跡 へキズ (後書き)

同じ臭い 中二 (r y)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1303u/>

紅い夜 -アカイヨル-

2011年11月30日20時53分発行